EXCAVATION REPORT ON THE EIGHTH INSULA, REGIO Ⅱ,
DECUMANUS Ⅸ, ARCHAEOLOGICAL SITE
OF THE PARS OCCIDENTALIS IN THE CAPITAL HEIAN

2021

ANZAI KOUGYOU CO., LTD.

平安京右京九条二坊八町跡発掘調査報告書

2021

安西工業株式会社

平安京右京九条二坊八町跡
発掘調査報告書

2021

安西工業株式会社

平安京右京九条二坊八町跡
発掘調査報告書

2021

安西工業株式会社

例　　言

1．本書は、安西工業株式会社が日本エスリード株式会社（以下、日本エスリード）から委託を受けて実施した平安京跡（右京九条二坊八町）の発掘調査報告書である。

2．本調査は京都市下京区梅小路高畑町1－2において日本エスリードがマンション建設の計画が予定されたことから、その工事実施に先立ち発掘調査（京都市番号 19H263）を実施した。

3．調査地は平安京右京九条二坊八町跡に位置し、平安時代の都城に関連する遺構の発見を主眼とし、また、2019 年9月 25 日に実施された試掘調査により確認された下層遺構の時代の特定も調査の目的であった。

4．発掘調査の面積は 396 ㎡である。

5．発掘調査の期間は、2019 年 12 月9日から 2020 年2月 28 日である。

6．発掘調査及び本報告書作成にあたっては、下記の体制で実施した。

調 査 主 体　　安西工業株式会社

調　査　員　　濱口芳郎

調査補助員　　山本雅徳　　竹本安伽

整　理　員　　岩本めぐみ　吉盛莉世　藤本祐亘

7．発掘調査に伴う空中写真撮影及び測量図化は安西工業株式会社榊孝浩・鈴木敏雄・新山王諒太が行った。

なお細部図化については山本雅徳・竹本安伽が行った。

8．使用地図は京都市都市計画局作成の都市計画基本図（縮尺1:2500）中河原である。使用測地系は世界測地系　平面直角座標系Ⅵ、使用標高は TP：東京湾平均海面高度、使用土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』を用いた。

9．本書に使用した遺構写真は濱口が、遺物写真は藤本及び西近畿文化財研究所が撮影した。

10．遺物整理並びに遺物実測図作成、遺物・遺構実測図のトレースは新山王、岩本、吉盛と西近畿文化財調査研究所が行った。また、出土木製品の樹種同定はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

11．遺構番号は遺構の種類ごとに番号を付し、番号の前に遺構の種類を記した。遺物番号については種別ごとに分け、通し番号を付した。なお、挿図の遺物番号と写真図版の遺物番号は一致する。

12．本書の執筆は第1・2・4章を濱口が、第3章を濱口と新山王が、第5章をパリノ・サーヴェイ株式会社が行った。

13．本書の編集は岩本、吉盛の協力のもと濱口と永井信弘が行った。

14．本書の土師器・須恵器の年代観については、小森俊寛氏の『京から出土する土器の編年的研究』(京都編集工房 2005 年) の研究成果に基づいた。

580 年頃	670 年頃	750 年頃	840 年頃	930 年頃	1010 年頃	1080 年頃	1180 年頃	1270 年頃	1360 年頃	1440 年頃	1500 年頃	1580 ～ 90 年頃
直前期	京Ⅰ期		京Ⅱ期（京都Ⅰ期）	京Ⅲ期（京都Ⅱ期）	京Ⅳ期（京都Ⅲ期）	京Ⅴ期（京都Ⅳ期）	京Ⅵ期（京都Ⅴ期）	京Ⅶ期（京都Ⅵ期）	京Ⅷ期（京都Ⅶ期）	京Ⅸ期（京都Ⅷ期）	京Ⅹ期（京都Ⅸ期）	京Ⅺ期（京都Ⅹ期）	京Ⅻ期（京都Ⅺ期）
古 中 新	古 中 新		古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新

15．発掘調査の実施並びに本書の作成に当たっては、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の馬瀬智光、奥井智子の両氏にご指導、ご教示を頂いた。また、龍谷大学文学部教授國下多美樹氏、木許守氏には外部検証委員として調査、執筆に際し有益な助言をいただいた。

目　　次

第1章　はじめに

1）調査に至る経緯と経過 ・・・

図 14　自然流路 01（北から）・・11
図 15　第 1 遺構面遺構平面図（1：200）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
図 16　溝 01・02 平面図・断面図（1：50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
図 17　井戸 01 掘り下げ作業・・14
図 18　第2遺構面遺構平面図（1：200）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
図 19　井戸 01 平面図・断面図（1：20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
図 20　土壙 01 平面図・断面図（1：20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
図 21　土壙 02 平面図・断面図（1：20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
図 22　溝 01 出土遺物実測図（1：4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
図 23　井戸 01 出土遺物実測図（1：4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
図 24　土壙 01 出土遺物実測図（1：4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
図 25　自然流路 01 出土遺物実測図（1：4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
図 26　第 1 遺構面犂溝出土遺物実測図（1：4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
図 27　第 1 層出土遺物実測図（1：4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
図 28　第 10 層出土遺物実測図（1：4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
図 29　第 12 層出土遺物実測図（1：4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
図 30　第 12 層出土土錘実測図（1：2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
図 31　第 13 層出土遺物実測図（1：4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
図 32　第 27 層出土遺物実測図（1：4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
図 33　第 27 層出土土錘実測図（1：2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
図 34　井戸 01 曲げ物の井戸枠（1：6）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
図 35　井戸 01 井戸枠外の縦板（1：8）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
図 36　第2遺構面湿地跡出土の木製品1（1：8）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
図 37　第2遺構面湿地跡出土の木製品2（1：8）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
図 38　第2遺構面湿地跡出土の木材（1：8）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

図 版 目 次

図版1　遺構1 北・南区第1遺構面オルソ合成写真（1：200）
図版2　遺構2 北・南区第2遺構面オルソ合成写真（1：200）
図版3　遺構3　1　南区第1遺構面全景（北から）
　　2　南区第2遺構面全景（北から）

図版4　遺構4　1　北区第1遺構面全景（北から）
2　北区第2遺構面全景（北から）
図版5　遺構5　1　北区南半の溝 01（左）と溝 02（右）(東から)
2　北区北半第1遺構面湿地跡検出状況（南から）
図版6　遺構6　1　北区北半第2遺構面湿地跡木製品出土状況1（南から）
2　北区北半第2遺構面湿地跡木製品出土状況2（北から）
図版7　遺構7　1　井戸 01 検出状況1（東から）
2　井戸 01 検出状況2（北から）
図版8　遺構8　1　井戸 01 完掘状況1（東から）
2　井戸 01 完掘状況2（北から）
図版9　遺構9　1　井戸 01 土師器皿 AA 出土状況（東から）
2　土壙 01・02 完掘状況（南から）
図版 10 遺構 10 1　土壙 01 土層断面（東から）
2　土壙 02 土層断面（東から）
図版 11　遺物1
図版 12　遺物2
図版 13　遺物3
図版 14　遺物4
図版 15　遺物5
図版 16　遺物6
図版 17　遺物7
図版 18　木製品組織1
図版 19　木製品組織2

表　目　次

表1　平安京右京九条二坊における調査一覧表 ・・・

第1章　はじめに

1）調査に至る経緯と経過

日本エスリードは京都市下京区梅小路高畑町1－2に新たなマンションの建設を計画した。当該地は平安京右京九条二坊八町跡に該当し、所定の手続きとして京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下文化財保護課）に文化財保護法第93条第1項に基づく届出を令和元年9月2日付で行った。この届出を受け、文化財保護課は令和元年9月25日に試掘調査を行い、その結果、平安京に関連する遺構とその下層にさらに古い遺構面の存在を確認するに至った。

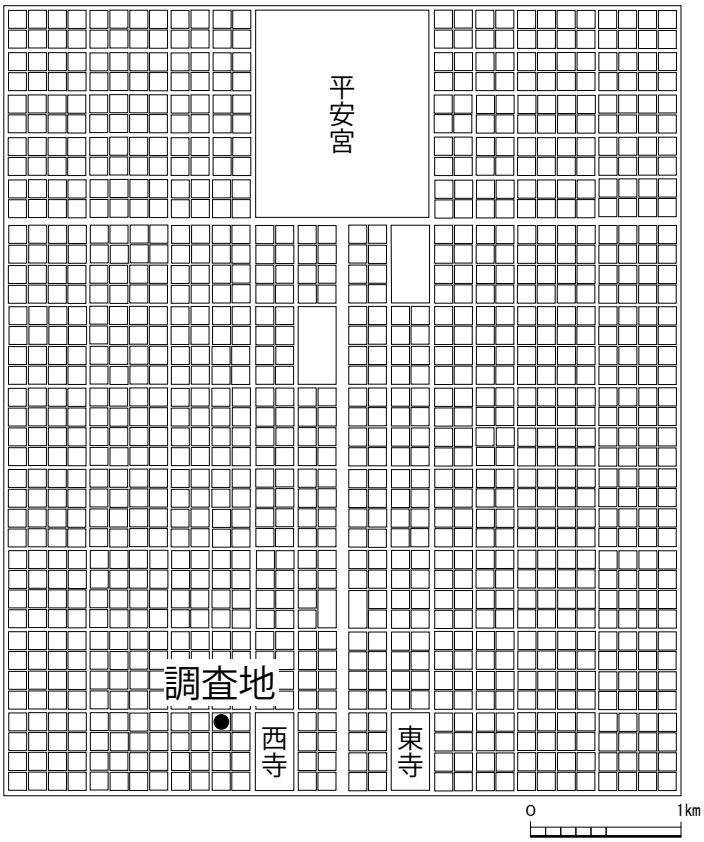


図1　平安京条坊上の調査位置（1：5000）

この結果を受け、文化財保護課は令和元年10月11日付け、文文財第540号で日本エスリードに対し、試掘調査の結果を通知するとともに、記録保存のための発掘調査を実施するよう指導した。これを受けて日本エスリードは発掘調査事業を安西工業株式会社（以下安西工業）に委託した。調査に先立ち、安西工業は文化財保護課の指導のもと、外部検証委員会を設置し、龍谷大学文学部教授の國下多美樹氏と木許守氏に委員を委嘱した。

文化財保護課は、一階建物面積533㎡のうち396㎡について、発掘調査が必要であると指導した。調査計画では南北44m、東西9mの調査区を設定、調査を行うこととしたが、敷地内に排土を置ききれないことから、南北の2区にわけて反転調査を行うこととした。調査は南区から開始し、埋戻しののち、北区の調査を行った。調査は令和元年12月9日より開始し、令和2年1月23日に南区の作業を終了、翌24日より北区の作業を開始、2月27日に埋戻しを完了し、翌28日にコンテナハウス、仮設トイレ等の撤去を行い、現地調査を終了した。調査中には遺構面ごとの作業完了時に文化財保護課の検査を受け、また、國下氏、木許氏の調査検証を受けた。

2）調査地の位置と環境

調査地は桂川の東 1.75 ㎞、桂川と鴨川の合流点より北に6㎞に位置する。『池亭記』の記事から右京地域は古くより低湿で、平安時代の極早い時期に衰退したとされる。調査地は先にも記したように平安京右京九条二坊八町跡に該当し、「平安京条坊復元図」によると、針小路の一部が調査地内にかかる可能性があった。

座標データのわかる信濃小路北側溝より北に 250m 前後のところに針小路北側溝が位置するが、調査地内に存在する可能性があった[1)]。

さらに、京都市文化財保護課の 2020 年度の試掘調査報告にも針小路北側溝を検出したとの記載がある[2)]。

周辺の調査では弥生～古墳時代の遺跡である唐橋遺跡に隣接している。『拾芥抄』の古図には八町を含む右京九条二坊八町東側は「植松」と記され、東寺領とされていたことがわかるとともに、少なくとも九条の西堀川小路より西は、鎌倉時代頃には耕作の難しい湿地であったとみられる[3)]。2020 年度の試掘調査でもトレンチ北端では湿地跡の様相を示していた。

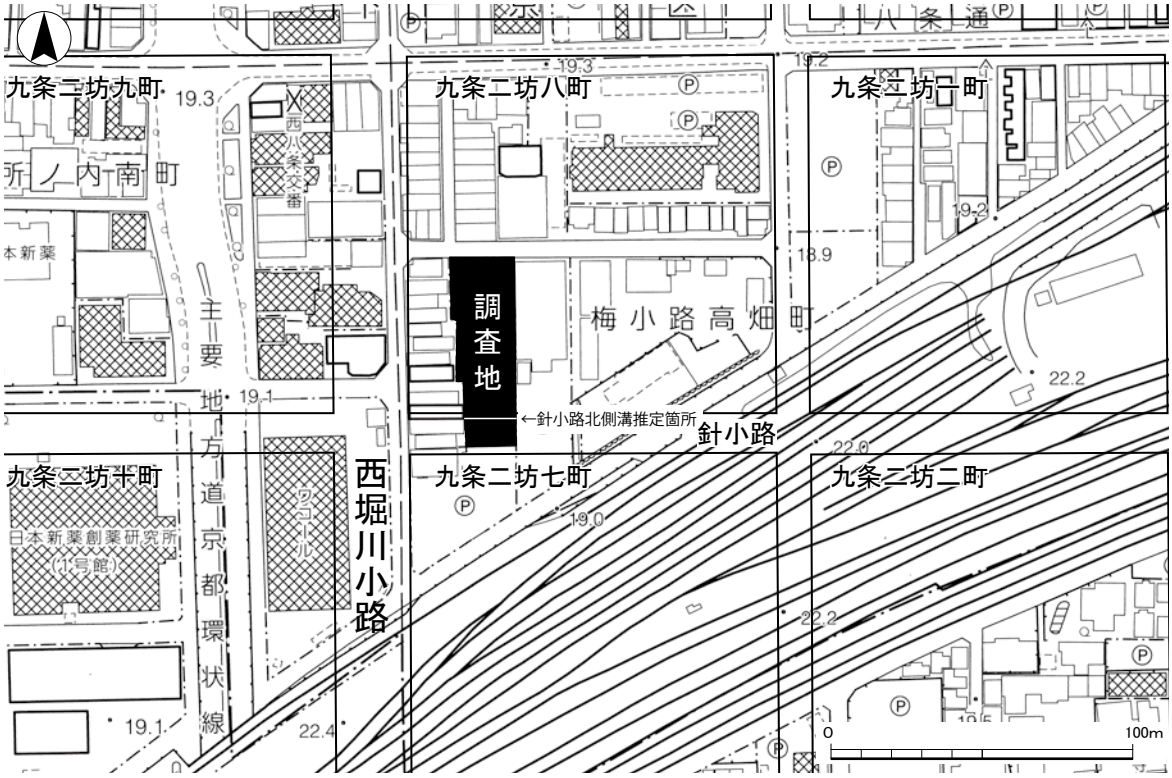


図2　調査地位置図（1：2500）

註

1）辻純一「条坊制とその復元」『平安京提要』古代学協会・古代学研究所　角川書店　1994 年

2）京都市文化財保護課『京都市内遺跡試掘調査報告　令和元年度』　2020 年

3）山田邦和「左京と右京」『平安京提要』古代学協会・古代学研究所　角川書店　1994 年

3） 周辺の調査

右京九条二坊内での発掘調査は、57 件行われている。発掘調査件数は3件と決して多くないが、試掘・立会調査件数は比較的多く、大まかではあるが右京九条二坊の平安時代以降の様子をうかがい知ることができる。

西堀川小路の西では洪水による氾濫原堆積、あるいは湿地で見られる粘土堆積が顕著に認められ、条坊地割の施工後、桂川あるいはその支流の河川氾濫とそれにともなう湖沼化が進行し、平安時代の遺構の遺存する比率は低い。一方、西堀川小路東側では平安遷都以前の湿地堆積は認められるが、氾濫等による遺構面の破壊はあまり認められず、平安時代やそれ以前の遺構が比較的良好な状態で残されている。このように、西堀川小路あたりを境にして遺構の遺存状況が大きく異なっているように推測される。

ここでは右京九条二坊内で行われた主な調査を紹介しておく（図3・表1）。

二町の3の地点で 1987 年度に行われた調査（87HK-YE）では平安前期の土壙や柱穴、古墳時代の

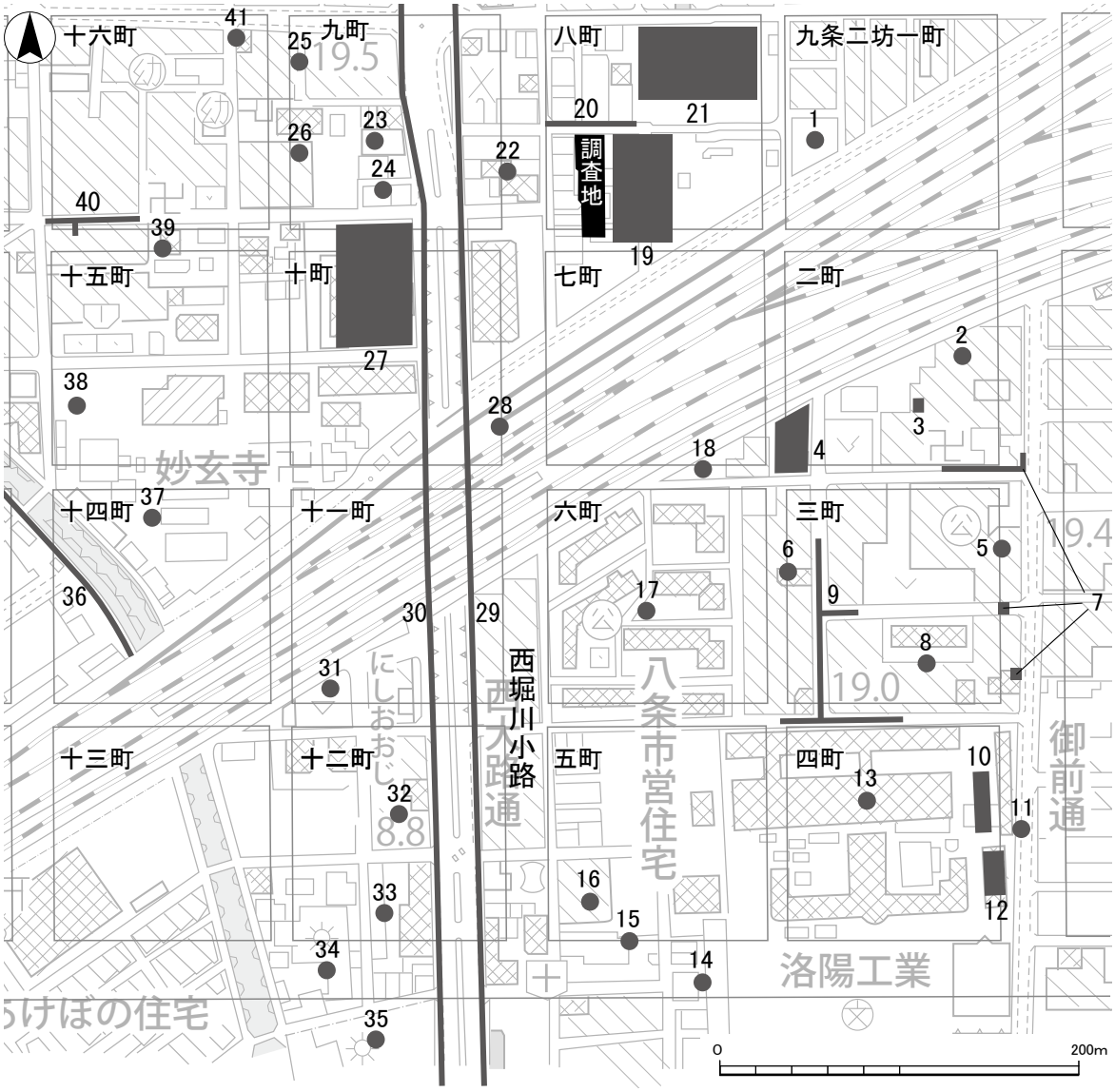


図3　平安京右京九条二坊における調査箇所（1：4000）

番号	町名	調査年度	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号	文献
1	一町	2018 年度	下京区梅小路高畑町	2018 年2月6日	中世包含層，古代包含層，－氾濫堆積	15 ㎡	17H508	試掘調査報告　平成 30 年度　2019 年
2	二町	2017 年度	南区唐橋平垣町	2017 年5月 17 日・23 日	時期不明包含層、黄褐色砂礫（地山）	—	16H540	詳細分布調査報告　平成 29 年度　2018 年
3		1987 年度	南区唐橋平垣町	1987 年7月 15 日～ 9月 12 日	古墳時代の竪穴住居跡、平安時代の柱穴など	290 ㎡	87HK － YE	昭和 62 年度　埋蔵文化財調査概要　1991 年
4		1994 年度	南区唐橋平垣町	1994 年8月8日～ 11 月2日	西靭負小路、西側溝、九条坊門小路側溝など	369 ㎡	94HK-ZM001	平成6年度　埋蔵文化財調査概要　1996 年
		1994 年度	南・唐橋平垣町	1994 年6月1日	西靭負小路、西側溝	—	—	試掘調査概報　平成6年度　1995 年
5	三町	2006 年度	南・唐橋平垣町	2006 年7月 25 日	近世以降の包含層	—	—	立会調査報告　平成 18 年度　2007 年
6		2019 年度	南・唐橋平垣町	2019 年 12 月4日	時期不明包含層	—	18H861	詳細分布調査報告　令和元年度　2020 年
7		1981 年度	南・唐橋門脇町　ほか	1981 年8月 19 日～1982 年1月 27 日	平安時代中期の井戸2、古墳時代の流路ほか	—	—	昭和 56 年度　埋蔵文化財調査概要（試掘・立会調査編）　1983 年
8		1998 年度	南・唐橋平垣町	1998 年8月 19 日	平安時代の南北溝	—	—	試掘調査概報　平成 10 年度　1999 年
9		2017 年度	南区唐橋平垣町　地先	2016 年 12 月 21 日～2017 年3月 29 日	灰色シルト，オリーブ黒色泥砂	—	16H557	詳細分布調査報告　平成 29 年度　2018 年
10	四町	1985 年度	南区唐橋大宮尻町（洛陽工業高校）	1986 年1月 13 日～4月 19 日	平安時代の掘立柱建物、古墳時代の竪穴住居跡	590 ㎡	85HK － RK Ⅱ	昭和 60 年度　埋蔵文化財調査概要　1988 年
		2018 年度	南・唐橋大宮尻町	2018 年 10 月 30 日・11 月 1 日	黄褐色砂泥，褐色砂泥灰黄色砂泥など	—	17 H 809	詳細分布調査報告　平成 30 年度　2019 年
11		2017 年度	南区大宮尻町　地先	2017 年8月 25 日・28 日	黄灰色礫混じり粗砂，暗灰黄色砂礫	—	29C044	詳細分布調査報告　平成 29 年度　2018 年
		2018 年度	南・唐橋西寺町	2018 年9月3日	盛土	—	30C039	詳細分布調査報告　平成 30 年度　2019 年
12		1978 年度	南区唐橋大宮尻町（洛陽工業高校）	1979 年1月 25 日～3月 10 日	平安時代の掘立柱建物、古墳時代の竪穴住居跡	360 ㎡	78HK-PK001	昭和 53 年度　埋蔵文化財調査概要　2011 年
13		2018 年度	南区唐橋大宮尻町	2018 年 12 月 10 日～ 14 日	顕著な遺構・遺物なし	126 ㎡	17H809	試掘調査報告　平成 30 年度　2019 年
14	五町	2019 年度	南・唐橋大宮尻町	2019 年 10 月 10 日	旧耕作土	—	19H373	詳細分布調査報告　令和元年度　2020 年
15		1994 年度	南・唐橋大宮尻町	1994 年7月 11 日	西堀川小路路面	—	—	試掘調査概報　平成6年度　1995 年
16		2006 年度	南・唐橋大宮尻町	2006 年 10 月4日	現代盛土	—	—	立会調査報告　平成 18 年度　2007 年
17	六町	2016 年度	南区唐橋平垣町	2016 年9月 26 日～ 28 日	陸部、湿地・河川の堆積	52 ㎡	16H183	試掘調査報告　平成 28 年度　2017 年
18	七町	2017 年度	南区唐橋平垣町	2017 年9月1日・5日	時期不明の土坑	—	17H275	詳細分布調査報告　平成 29 年度　2018 年
19	八町	2010 年度	下京区梅小路高畑町	2010 年9月 17 日	湿地状の堆積	36 ㎡	10H225	試掘調査報告　平成 22 年度　2011 年
20		1979 年度	下・梅小路高畑町　地先	1979 年4月 12 日	調査不可能	30.90 ㎡	—	試掘・立会調査報告　昭和 55 年度　1980 年
21		1997 年度	下・梅小路高畑町　ほか	1997 年5月 26 日	平安時代後期の井戸・井戸状遺構・土壙	—	№54	試掘調査概報　平成9年度　1998 年
22	九町	1994 年度	下・七条御所ノ内南町他	1994 年7月6日	西堀川・路面・側溝	—	—	試掘調査概報 平成6年度　1995 年
23		2005 年度	下京区御所ノ内南町	2006 年2月8日	湿地状堆積	15 ㎡	06H588	試掘調査報告　平成 19 年度　2008 年
24		2008 年度	下京区七条御所ノ内南町	2008 年4月 11 日	北半湿地堆積・南半地山	42 ㎡	07H540	試掘調査報告　平成 20 年度　2009 年
25		2006 年度	下・七条御所ノ内南町	2006 年7月 24 日	現代盛土	—	—	立会調査報告　平成 18 年度　2007 年
26		2016 年度	下・七条御所ノ内南町	2016 年 11 月1日・2日・10日	湿地状堆積	—	16H403	詳細分布調査報告　平成 28 年度　2017 年
27	十町	1979 年度	南区吉祥院西ノ庄門口町	1980 年1月 16 日～2月3日	—	75 ㎡	76HK-PA	昭和 54 年度　埋蔵文化財調査概要　2012 年
28		2019 年度	下京区唐橋高畑町　ほか	2019 年 10 月8日・9日	氾濫堆積	14 ㎡	18H850	試掘調査報告　令和元年度　2020 年
29	十一町	1980 年度	—	—	—	—	—	試掘・立会調査報告　昭和 55 年度　1980 年
30		1980 年度	—	—	—	—	—	試掘・立会調査報告　昭和 55 年度　1980 年
31		2010 年度	南区唐橋西平垣町	2010 年7月9日	湿地状堆積	28 ㎡	10H126	試掘調査報告　平成 22 年度　2011 年
32	十二町	2006 年度	南・唐橋西平垣町	2006 年6月 21 日・27 日	灰黄褐色微砂の地山		—	立会調査報告　平成 18 年度　2007 年
33		2004 年度	南区吉祥院清水町	2004 年8月 11 日	顕著な遺構なし	24 ㎡	04H134	試掘調査概報　平成 16 年度　2005 年
34		2019 年度	南・吉祥院清水町	2019 年 12 月6日	盛土		19H526	詳細分布調査報告　令和元年度　2020 年
35		2005 年度	南・吉祥院清水町 1 番	2006 年1月 16 日・25 日	遺構、遺物なし	—	—	立会調査報告　平成 18 年度　2007 年
36	十四町	1980 年度	—	—	—	—	—	試掘・立会調査報告 昭和 55 年度　1980 年
37		2015 年度	南区吉祥院西ノ庄門口町	2015 年4月 22 日	湿地状堆積，氾濫堆積	19 ㎡	14H506	試掘調査報告　平成 27 年度　2016 年
38	十五町	1992 年度	南・吉祥院西ノ庄門口町	1992 年7月6日	桂川氾濫堆積	—	—	試掘調査概報　平成4年度　1993 年
39	十五町十六町	2018 年度	南・吉祥院西ノ庄門口町	2018 年9月 13 日・20 日・27 日	水成堆積	—	18 H 226	詳細分布調査報告　平成 30 年度　2019 年
40	十六町	1984 年度	南区吉祥院西ノ庄東屋敷町	1984 年9月 10 日～ 10 月 15 日	遺構未検出	211 ㎡	—	昭和 59 年度　埋蔵文化財調査概要　1990 年
41		1979 年度	下・七条御所ノ内南町	1979 年5月 27 日	時期不明の柱穴、平安時代の溝1	92.99 ㎡	—	試掘・立会調査報告　昭和 55 年度　1980 年

※文献については以下のように標記した

京都市埋蔵文化財調査概要→埋蔵文化財調査概要　京都市内遺跡試掘調査概報→試掘調査概報　京都市内遺跡試掘・立会調査報告→試掘・立会調査報告
京都市内遺跡立会調査報告→立会調査報告　京都市内遺跡立会調査概報→立会調査概報　京都市内遺跡試掘・立会調査概報→試掘・立会調査概報
京都市内遺跡分布調査報告→分布調査報告

表1　平安京右京九条二坊における調査一覧表

竪穴住居が検出された[4]。また、4の地点で 1994 年度に行われた調査（94HK-ZM001）では西靱負小路、西側側溝、九条坊門小路側溝などが検出された[5]。

三町の7の地点で 1981 年度に行われた調査では、平安時代中期の井戸2基、古墳時代の流路などが検出された[6]。また、8の地点で 1998 年度に行われた調査では、平安時代の南北溝が検出された[7]。

四町の旧市立洛陽工業高校構内では 1978 年度（78HK-RK001）[8] に 12 地点、1985 年度（85HK-RKⅡ）[9] には 10 地点の2度にわたって発掘調査が行われた。これらの調査では平安時代の建物跡以外に古墳時代の竪穴住居跡が見つかっている。

八町では 1997 年度（No.54）と 2010 年度（10H225）に試掘調査が実施された。21 地点で行われた 1997 年度調査では、平安時代から鎌倉時代の2基の井戸[10]、19 地点で行われた 2010 年度調査（10H225）では湿地跡[11] が確認されている。

三町と四町にまたがった 2016 年度調査（16H557）[12] の 9 地点、六町では 2016 年度調査（16H183）[13] の 17 地点、九町では 2008 年度調査（07H540）[14] の 24 地点、十町では 1979 年度調査（79HK-PA）[15] の 27 地点、十一町では 2019 年度調査（18H850）[16] の 28 地点と、2010 年度調査（10H126）[17] の 31 地点でそれぞれ試掘調査が行われ、いずれの地点においても湿地跡が確認されている。

註

4）『昭和 62 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所　1991 年

5）『平成6年度　京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所　1996 年

6）『昭和 56 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所　1983 年

7）『京都市内遺跡試掘調査概報　平成 10 年度』京都市文化市民局　1999 年

8）『昭和 53 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所　2011 年

9）『昭和 60 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所　1988 年

10）『京都市内遺跡試掘調査概報　平成9年度』京都市文化市民局　1998 年

11）『京都市内遺跡試掘調査報告　平成 22 年度』京都市文化市民局　2011 年

12）『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 29 年度』京都市文化市民局　2018 年

13）『京都市内遺跡試掘調査報告　平成 28 年度』京都市文化市民局　2017 年

14）『京都市内遺跡試掘調査報告　平成 20 年度』京都市文化市民局　2009 年

15）『昭和 54 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所　2012 年

16）『京都市内遺跡試掘立会調査報告　令和元年度』京都市文化市民局　2020 年

17）『京都市内遺跡試掘調査報告　平成 22 年度』京都市文化市民局　2011 年

4）調査方法

建物建設部分の 533 ㎡部分が調査対象となっており、文化財保護課は建物建設予定地に調査地内南端より2m、東端より4mの地点を起点に東西9m、南北 44m のトレンチを設定するよう指導があった。調査面積は 396 ㎡である。排土は敷地内に置く予定であったため、一度にトレンチ全体を調査することはできず、図4のように南北に 22m ずつに分けて調査することとなった。試掘調査によって遺構面が 2 面あることがわかっており、第1遺構面までの約 1.2m と第2遺構面の約 0.5m は重機掘削を行った。精査、遺構掘削は人力によった。遺物整理作業は 2020 年2月 27 日より開始し、7 月末に作業を終了した。

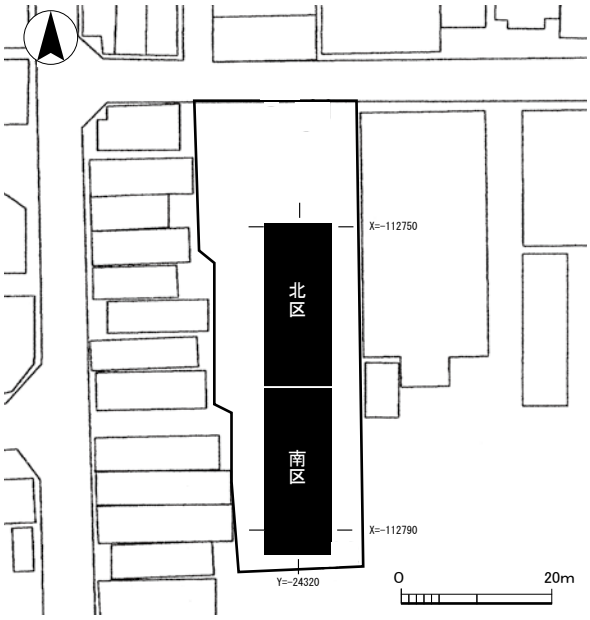


図4　トレンチ配置図（1：1000）

図5　重機掘削

図6　人力掘削

図7　実測作業

図8　写真測量

第2章　主な遺構

1）基本層序

調査地は耕作終了後、厚さ 0.8 ～1m の現代の整地が行われており、進入口を除き標高 19.4m 前後でほぼ平坦地である。整地土層の直下には 0.05 ～ 0.1 mの旧耕作土層が、その下には 0.1 ～ 0.15 mの近世の耕作土層（第1層）があり、第1層より下の層は調査区の南と北で異なる。試掘調査の結果を踏まえ、南区と北区でも第1遺構面と第2遺構面を検出した。

第1遺構面

浅黄色極細粒砂混りシルト層（第 12 層）上面で平安時代前期から中世以降の遺構が検出されたことから、この層は第1遺構面のベース土と考えられる。また、第 12 層は第2遺構面の湿地跡の南端部上面にまで及び、土器片がまとまって出土する箇所が複数見つかっている。

調査区の南端から北へ 25 ～ 28 mのところから湿地跡であったことを示す灰色粘土層（第 10 層）が浅黄色極細粒砂混りシルト層（第 12 層）上面に堆積することから、平安時代前期以降はこの部分は湿地であったとみられる。灰色粘土層 (第 10 層) では、犬頭大の岩石の集積が複数箇所認められた。さらに、湿地であったと考えられる調査区北半は調査区南半より傾斜して低くなっていたことがわかった。

第2遺構面

調査区南半では、青灰色礫混じり極粗砂（第 46 層）、北半では、灰白色シルト混じり細粒砂（第 27 層）と灰色粘土（第 38 層）上面から奈良時代の土壙や井戸が検出されたことから、これらの層は第2遺構面のベース土と考えられる。調査区北半では、この層の上に湿地跡であったことを示す灰白色粘土（第 13 層）が堆積することから、古墳時代後期～奈良時代にはすでにこのあたりは湿地であったとみられる。

地山面

調査区北端で行った深掘の結果、約3m掘り下げたところで地山とされる灰白色礫石層（第 47 層）が確認できた。また、南区では、第2遺構面ベース土直下、地表下約1m のところに地山とされる青灰色礫混じり極粗砂（第 46 層）が確認され、調査区南端と北端では地山の比高差は2m となり旧地形は南から北に傾斜していたことが判明した。

図9　調査区北端土層断面

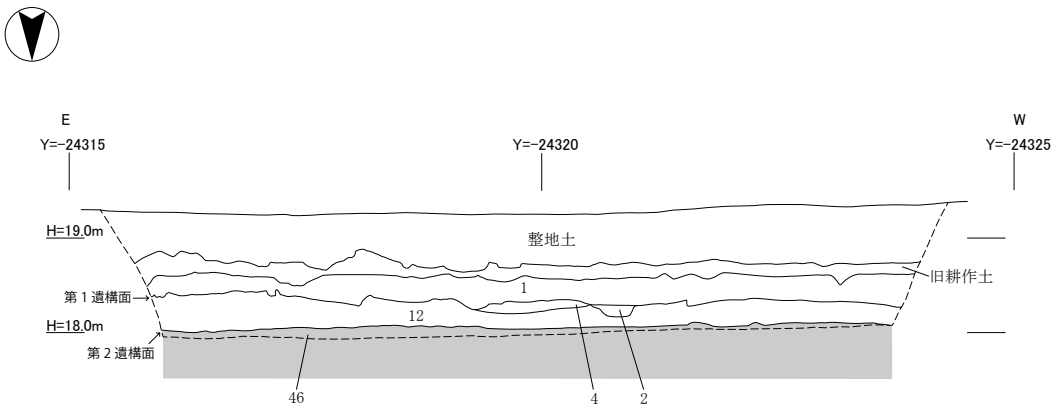


図 10　南壁土層断面図（1：80）

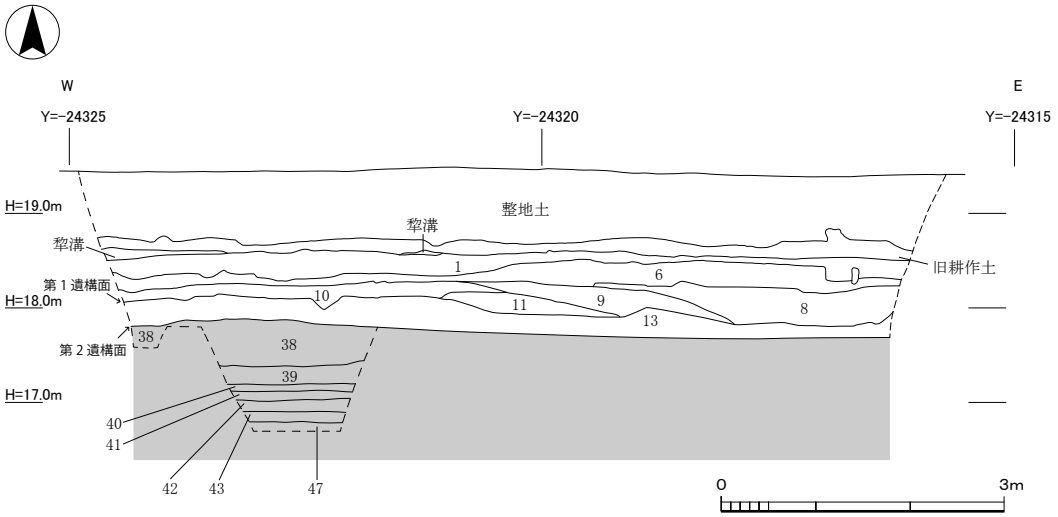


図 11　北壁土層断面図（1：80）

1　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粗砂混じりシルト
2　5Y4/1 灰色微砂混じり粘土質シルト（犂溝埋土）
3　5Y5/1 灰色粘土（溝 01・02 埋土）
4　5Y7/1 灰白色粘性シルト
5　5P6/1 紫灰色シルト（鉄分含侵）
6　5PB6/1 青灰色シルト
7　5PB5/1 青灰色粘土
8　10YR5/1 褐灰色粘土（自然流路 01 埋土）
9　7.5GY8/1 明緑灰色中粒砂
10　N4/ 灰色粘土（第 1 遺構面湿地堆積）
11　5B5/1 青灰色礫石混じり粘土（鉄分含侵）
12　7.5Y7/3 浅黄色極細粒砂混じりシルト（第 1 遺構面ベース土）
13　N7/ 灰白色粘土 (第2遺構面湿地堆積)
14　10GY7/1 明緑灰色中粒砂（井戸 01 掘方埋土）
15　10YR8/3 浅黄橙色細粒砂（井戸 01 掘方埋土）
16　2.5Y8/3 淡黄色細粒砂混じりシルト（井戸 01 掘方埋土）
17　5RP7/1 明紫灰色極細粒砂（井戸 01 埋土）
18　5RP7/1 明紫灰色細粒砂混じりシルト（井戸 01 埋土）
19　5RP7/1 明紫灰色細礫混じり粗粒砂（井戸 01 埋土）
20　5BG7/1 明青灰色細粒砂混じり極細粒砂
21　10BG7/1 明青灰色粗粒砂
22　2.5Y6/2 灰黄色細粒砂 (鉄分含侵)
23　10Y7/1 灰白色シルト
24　5GY8/1 灰白色粘性シルト
25　2.5GY8/1 灰白色極細粒砂（第 2 遺構面ベース土）
26　5B7/1 明青灰色粘土と 5RP7/1 明紫灰色粘土の混土
27　5Y8/2 灰白色シルト混じり細粒砂（第 2 遺構面ベース土）
28　5Y7/1 灰白色粘土
29　7.5Y7/3 浅黄色極細粒砂
30　7.5Y7/3 浅黄色粗粒砂混じり中粒砂（第 2 遺構面ベース土）
31　7.5GY8/1 明緑灰色中粒砂
32　10Y6/1 灰色粗粒砂
33　5GY8/1 灰白色粗粒砂
34　5Y8/2 灰白色と 10G7/1 明緑灰色混じり粘土
35　10Y8/2 灰白色細粒砂
36　10GY8/1 明緑灰色シルト
37　5B5/1 青灰色礫石混じりシルト
38　N4/ 灰色粘土 (第 2 遺構面ベース土)
39　10GY7/1 明緑灰色細粒砂
40　2.5YR5/2 灰赤色粗粒砂
41　10BG6/1 青灰色粘性シルト（しまりが悪い）
42　5Y4/1 灰色粘土（ごく少量の鉄分が上端に含侵）
43　2.5GY5/1 オリーブ灰色粘性シルト
44　2.5GY6/1 オリーブ灰色粘土
45　5GY6/1 オリーブ灰色粘土
46　5BG6/1 青灰色礫石混じり極粗砂（地山）
47　N7/ 灰白色礫石層（地山）

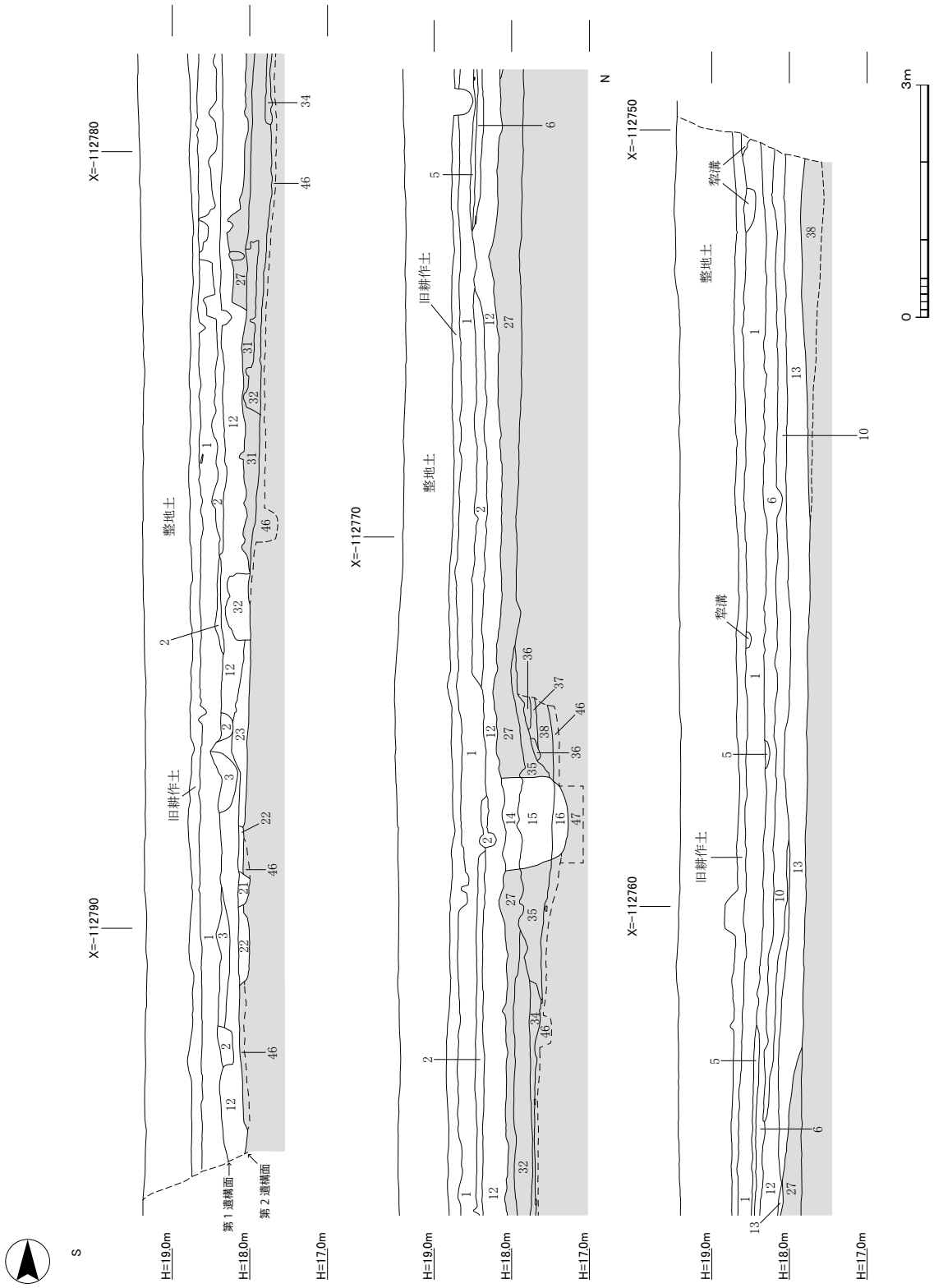


図 12　西壁土層断面図（1：80）

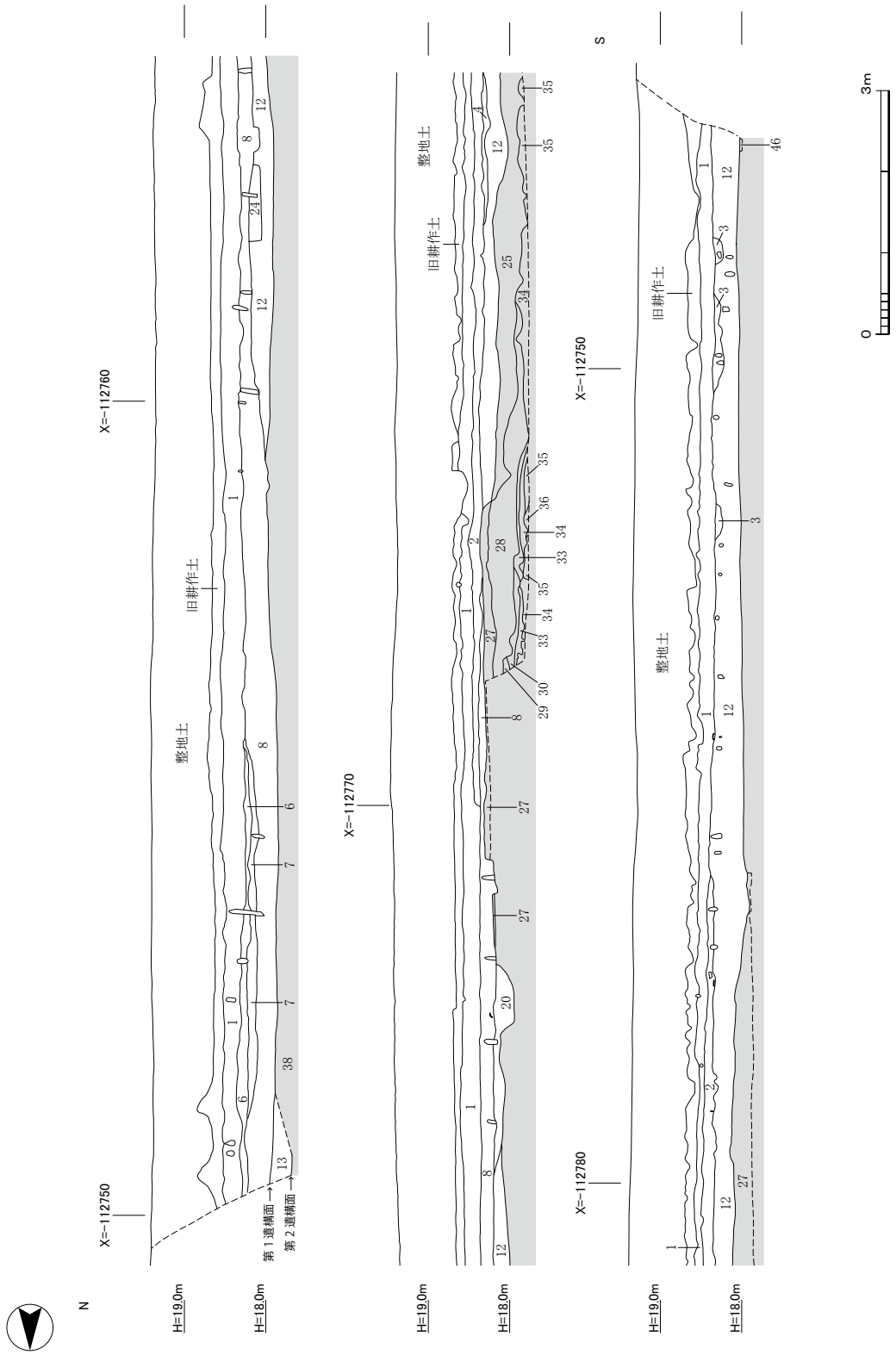


図 13　東壁土層断面図（1：80）

2）第1遺構面の遺構

第1遺構面では平安時代前期から中世以降に至る遺構を検出した。

中世以降の遺構は8条の平行する耕作溝を検出した。おそらく、溝は複数で平行することや、深さも一定であることから犂痕とみなされる水田耕作に伴う犂溝と考えられる。

平安時代の遺構は条坊に伴う溝及び自然流路を検出した。以下、これらの遺構について記述するが、湿地跡については、第4章でふれるのでこの章では省略する。

溝 01

第1区南端で検出した東西方向の溝である。南肩が犂溝によって削平されている。現存の幅は約2mで深さ 0.2 mを測る。耕作地化する以前の遺構と考えられ、その位置から針小路北側溝とみられる。

溝埋土から須恵器坏 A・壺・甕・平瓦などが出土した。

溝 02

溝 01 より北に 1.5m の位置で検出した東西方向の溝で最大幅約1m、深さ 0.2m を測る。溝 01 と同じ埋土で、同時期に存在したと考えられる。その位置から築地内溝とみられる。

自然流路 01

北半に広がる湿地跡の北東部分で検出した流路の一部で、西岸を約 12m 検出した。

第1遺構面で検出していたが上面に犂溝が多数存在したため、第2遺構面まで掘り下げる際に掘削を行った。最深部の深さは 0.4 mである。

流路埋土から土師器皿 C・甕、須恵器坏 A・壺・平瓶、軒丸瓦、平瓦などが出土した。

図 14　自然流路 01（北から）

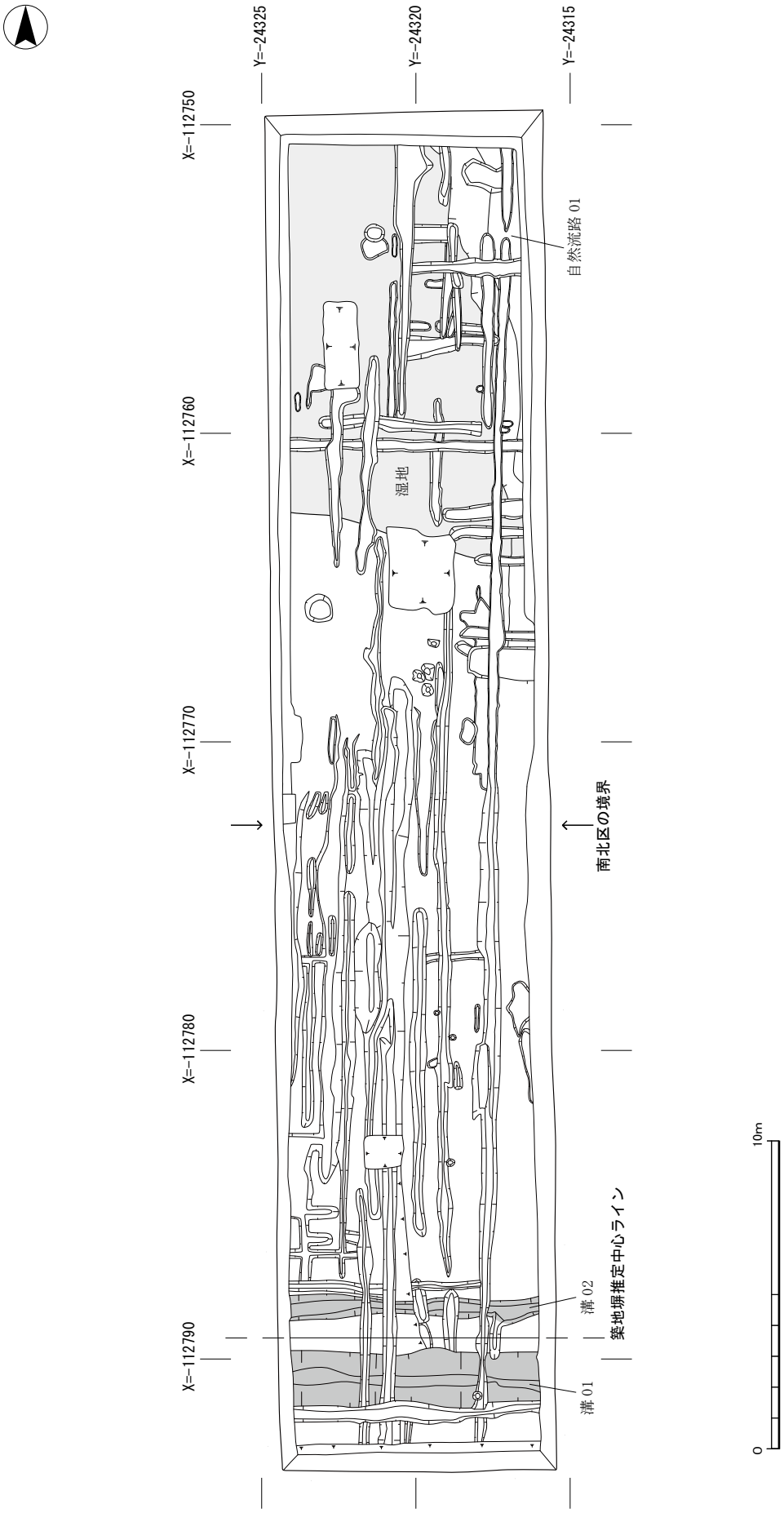


図 15　第1遺構面遺構平面図（1：200）

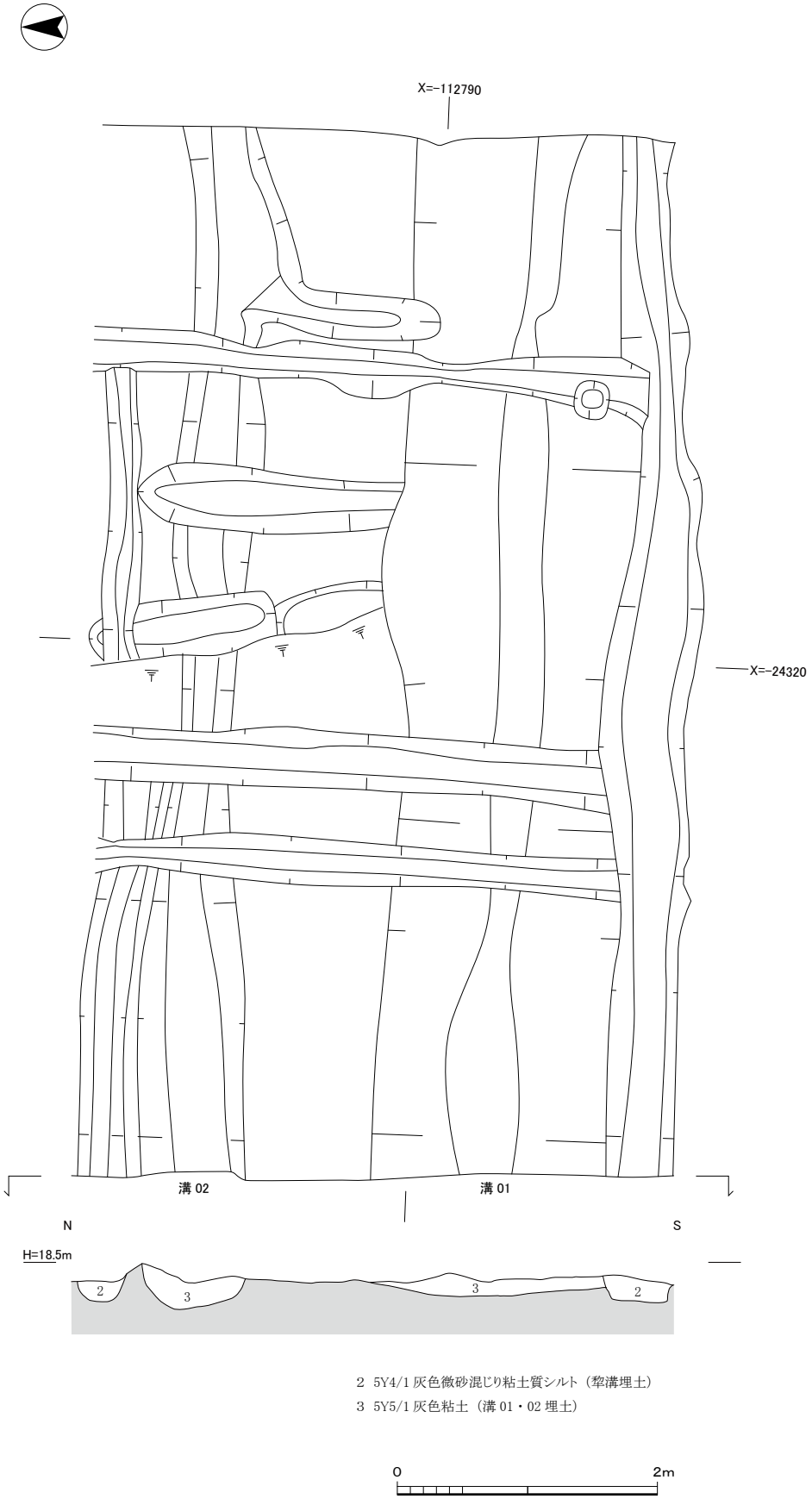


図 16　溝 01・02 平面図・断面図（1：50）

3）第2遺構面の遺構

第2遺構面では井戸1基、土壙2基を検出した。これらのほか、不定形土壙、小さな落込みなどが30ヶ所以上検出されているが、いずれもごく浅く、人為的なものとは考えられず、整地の際の土のブロックと見られる。以下、主な遺構について記述するが、湿地跡については、第4章でふれるのでこの章では省略する。

井戸 01

南区の北西角付近で検出した井戸である。掘方は1～ 1.4 m以上で深さは 0.6 mである。埋土は3層に分かれる。井戸枠本体は厚さ 0.008 mの曲げ物が 2 段遺存し、上段は最大径 0.8 m、高さ 0.4 mが残存していた。下段は直径 0.5 m、高さ 0.4 mで上段とは 0.1 ～ 0.15 mほど重なる。曲げ物の外側には厚さ 0.02 ～ 0.03 mの縦板6枚が井戸枠に沿って立てられていた。遺存していたもののうち最も大きな板は幅 0.32 m、高さ 0.34 m、厚さ 0.03 mであった。井戸枠内埋土からは完形の土師器皿 AA と皿 C が出土した。

土壙 01

調査区中央部で検出した土壙である。直径 0.9 m、深さ 0.5 mを測る。埋土は3層に分かれる。須恵器坏 A・坏 B 蓋、土師器甕、木片などが出土した。

土壙 02

土壙 01 の南約1mの地点で検出した土壙である。直径 0.5m、深さ 0.5m を測る。埋土は4層に分けられ、少量の土師器が出土した。

図 17　井戸 01 掘下げ作業

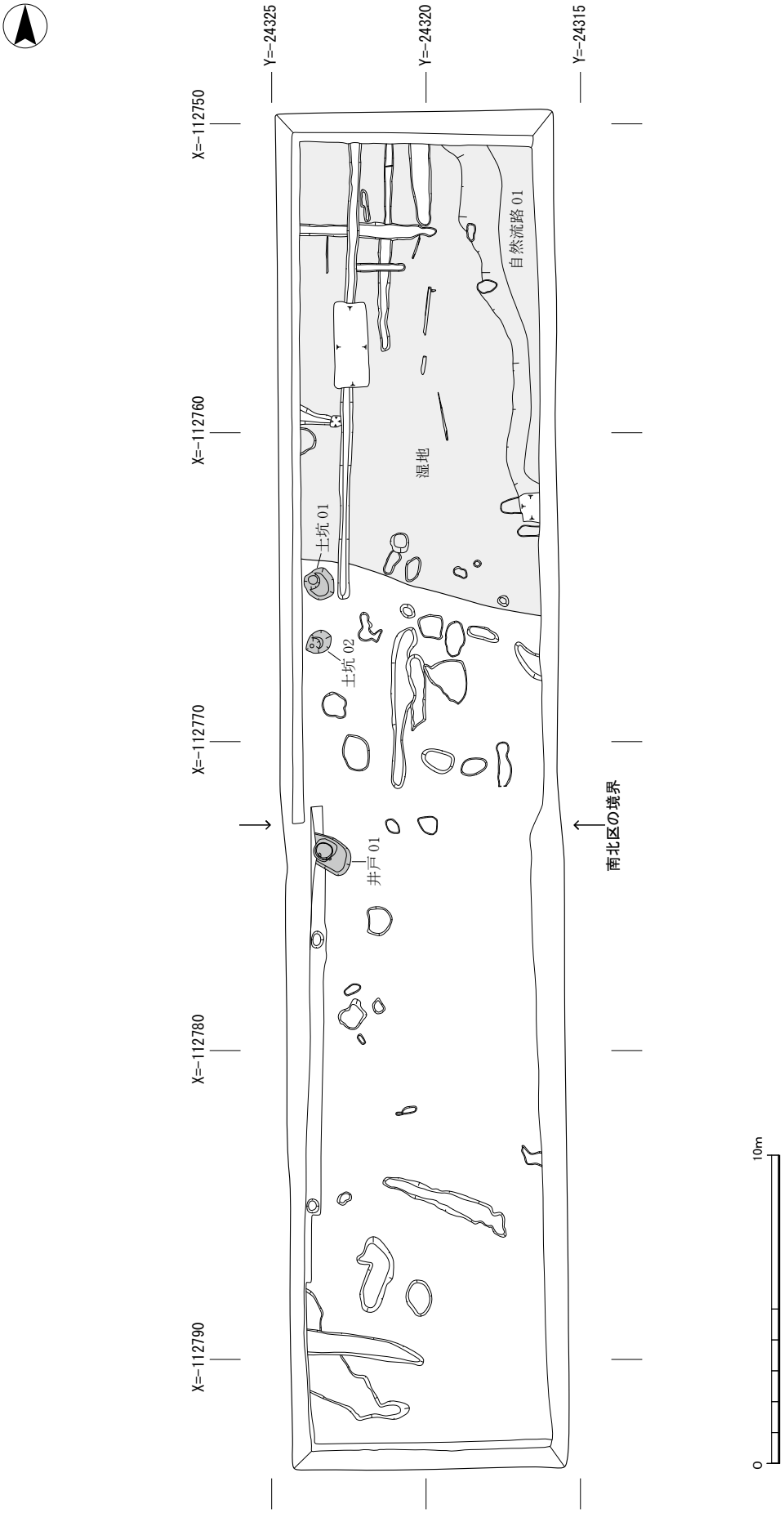
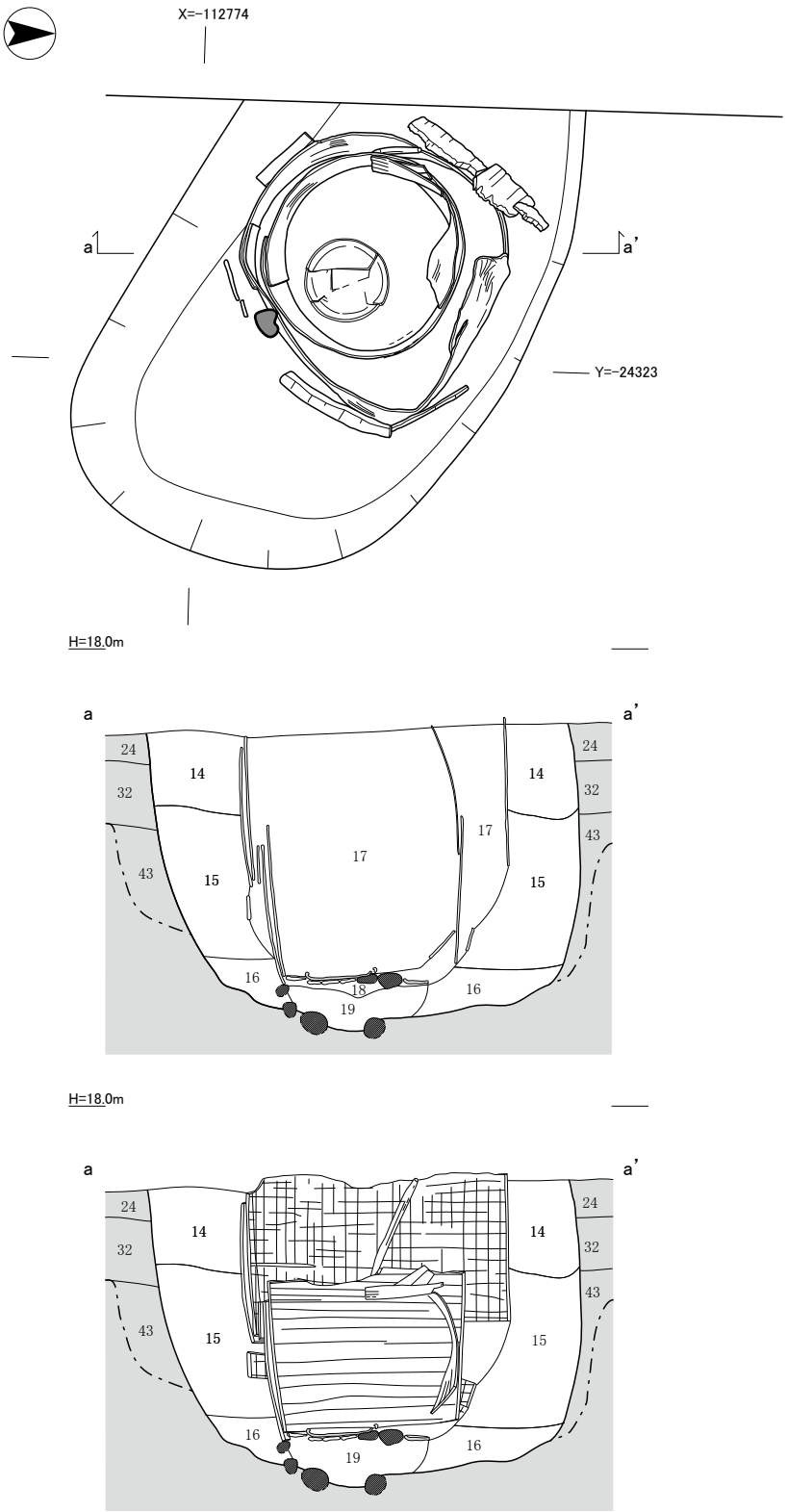


図 18　第2遺構面遺構平面図（1：200）



14　10GY7/1 明緑灰色中粒砂（井戸 01 掘方埋土）
15　10YR8/3 浅黄橙色細粒砂（井戸 01 掘方埋土）
16　2.5Y8/3 淡黄色細粒砂混じりシルト（井戸 01 掘方埋土）
17　5RP7/1 明紫灰色極細粒砂（井戸 01 埋土）
18　5RP7/1 明紫灰色細粒砂混じりシルト（井戸 01 埋土）
19　5RP7/1 明紫灰色細礫混じり粗粒砂（井戸 01 埋土）
24　5GY8/1 灰白色粘性シルト
32　10Y6/1 灰色粗粒砂
43　2.5GY5/1 オリーブ灰色粘性シルト

0　1m

図 19　井戸 01 平面図・断面図（1：20）

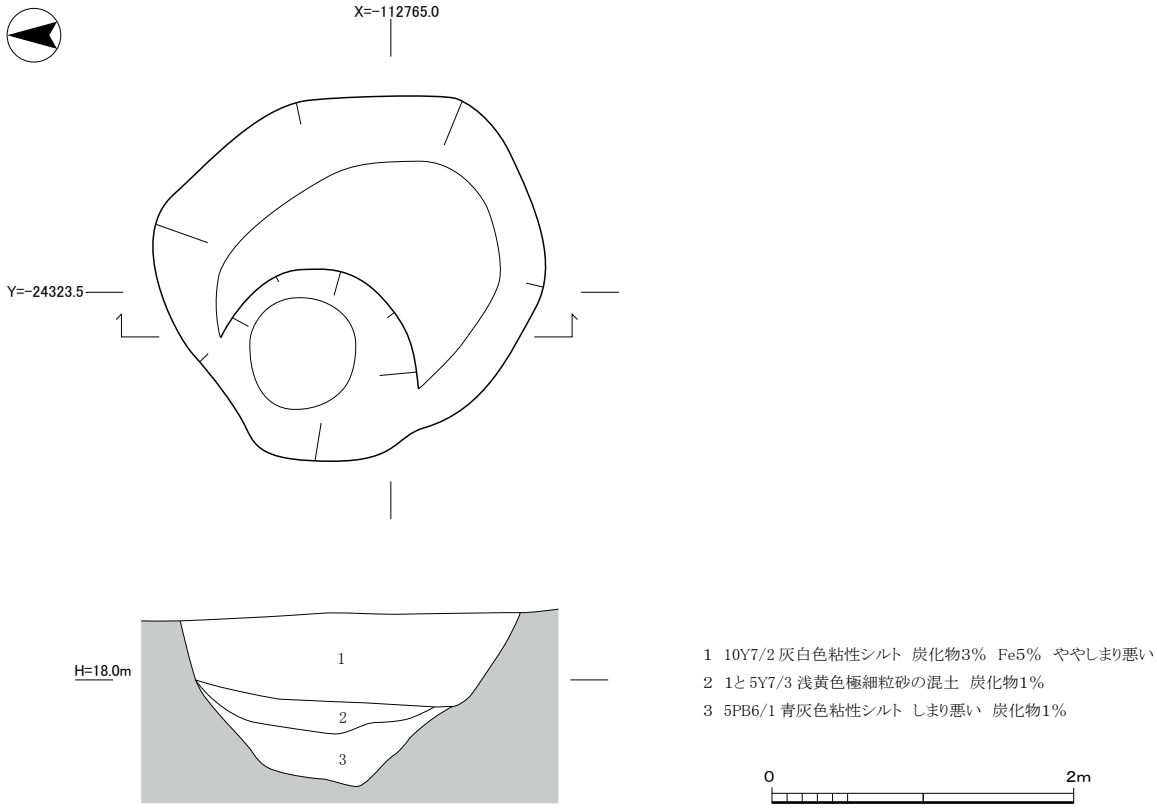


図 20　土壙 01 平面図・断面図（1：20）

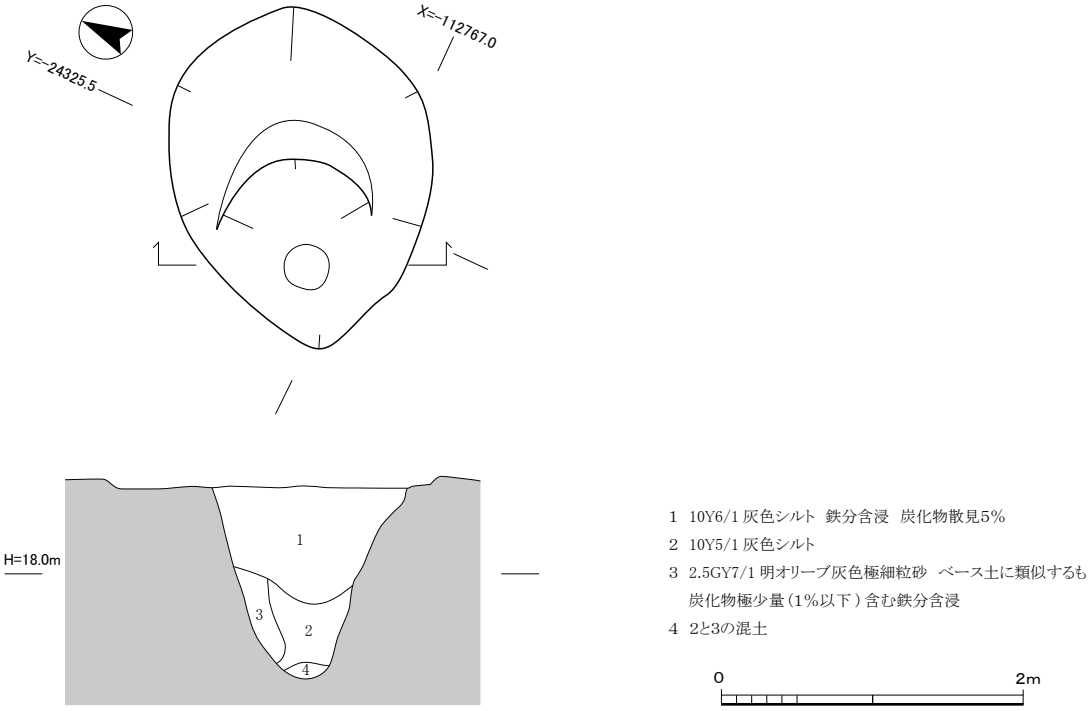


図 21　土壙 02 平面図・断面図（1：20）

第3章　主な遺物

今回の調査で整理コンテナ 16 箱の遺物が出土した。出土遺物は土師器、須恵器、瓦類、木製品である。土師器と須恵器はほぼ同量で、瓦は1割以下である。木製品は井戸枠材と湿地跡から出土した建築部材と見られる板材と角材、そして杭である。

以下、遺構出土遺物と包含層、犂溝、自然流路等からの出土遺物について概要を述べる。

1）遺構出土の土器、瓦

溝 01

1は須恵器坏 A である。復元口径 12.8 ㎝、残存高 4.0 ㎝を測る。胎土は緻密、焼成はやや軟、色調は5Y7/1 灰白色でやや褐色みをおびる。口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。京Ⅱ（京都Ⅰ）期新に比定され、9世紀前葉のものである。

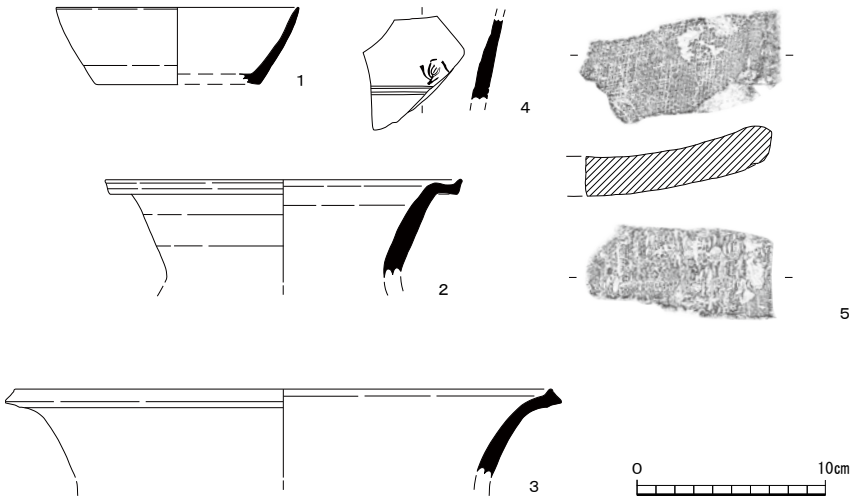


図 22　溝 01 出土遺物実測図（1：4）

2は須恵器壺 Q の口頸部である。復元口径 18.8 ㎝、残存高 5.4 ㎝を測る。胎土は緻密、焼成は良好、色調は N7/ 灰白色を呈する。頸部は外反し、口縁部は水平に屈曲し、口縁端部は斜め上に立ち上がる。内外面ともにヨコナデ調整を施す。京Ⅱ（京都Ⅰ）期古～中に比定され、8世紀後葉～末のものである。

3は須恵器甕の口縁部である。口径は 28.2 ㎝に復元され、残存高は 4.7 ㎝を測る。胎土は緻密、色調は 7.5Y7/1 灰白色で茶褐色の斑紋が散見される。頸部は外反し、口縁端部は斜め上方に立ち上がる。内外面ともにヨコナデ調整を施す。京Ⅱ（京都Ⅰ）期中に比定され、8世紀末～9世紀初頭のものである。

4は須恵器壺頸部の破片である。斜め上方に立ち上がり残存高は 5.7 ㎝である。胎土は緻密、焼成は良好、色調は N7/ 灰白色を呈する。内外面はヨコナデ調整を施す。外面に墨書が見られるが文字は判読できない。京Ⅱ（京都Ⅰ）期中に比定され、8世紀末～9世紀初頭のものである。

5は平瓦である。残存長 4.6 ㎝、残存幅 9.8 ㎝で側端面に面取りを施す。凹面は布目痕、凸面は縦方向の縄タタキ痕が残る。胎土には砂粒を少量含み、焼成は良好である。内外面の色調は N3/ 暗灰色で、断面は 2.5Y8/1 灰白色を呈する。

井戸 01

6は土師器皿 C である。井戸枠内埋土（第 18 層）から完形で出土した。口径 8.4㎝、器高 1.7 ㎝、底径 6.6 ㎝を測る。胎土は緻密、焼成は良好である。色調は 7.5YR8/3 浅黄橙色を呈する。底部内面

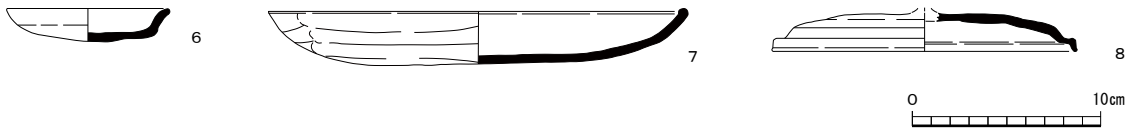


図 23　井戸 01 出土遺物実測図（1：4）

は不定方向のナデ調整、外面は指押さえによるナデ調整、口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。京Ⅱ（京都Ⅰ）期中に比定され、8世紀末のものである。

7は土師器皿AAである。井戸枠内埋土（第18層）から完形で出土した。口径20.0㎝、器高2.7～3.1㎝、底径12.0㎝を測る。胎土は緻密、焼成は良好で、色調は7.5YR7/4にぶい橙色を呈する。口縁部外面はヘラケズリ調整、内面はヨコナデ調整、底部内外面はナデ調整を施す。京Ⅱ（京都Ⅰ）期中に比定され、8世紀末のものである。

8は須恵器坏B蓋である。井戸枠内埋土（第17層）から出土した。復元口径16.0㎝、器高2.1㎝を測る。胎土は緻密で焼成は良好であるが、黒色の粒子を多量に含む。色調はN7/灰白色を呈し、内外面は墨をぼかしたような観を呈す。天井部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整を、口縁部内外面と天井部内面はヨコナデ調整を施す。縁部は屈曲する。京Ⅱ（京都Ⅰ）期中に比定され、8世紀末のものである。

土壙 01

9は須恵器杯B蓋である。残存高2.3㎝を測り、直径2.3㎝の中央部がくぼむ扁平なつまみを持つ。胎土は緻密で焼成は良好、色調はN6/灰色を呈する。外面の一部に自然釉が付着する。つまみとその周囲はヨコナデ調整を施す。天井部外面は回転ヘラ切り後ヨコナデ調整、内面はヨコナデ調整を施す。京Ⅱ（京都Ⅰ）期古～中に比定され、8世紀後葉のものである。

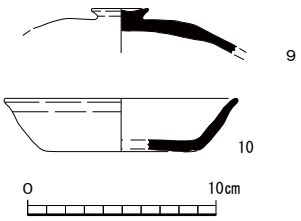


図 24　土壙 01 出土遺物実測図（1：4）

10は須恵器坏Aである。復元口径は12.2㎝、器高2.8㎝を測る。胎土は緻密、焼成は良好で色調はN7/灰白色を呈する。底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整を、その他はヨコナデ調整を施す。京Ⅱ（京都Ⅰ）期古～中に比定され、8世紀後葉のものである。

2）自然流路、犂溝、包含層出土の土器と瓦

自然流路 01

11は土師器皿AAである。口径15.8㎝、器高2.3㎝、底径10.0㎝を測る。胎土は少量の砂粒を含み焼成はやや軟、色調は10YR8/3浅黄橙色を呈する。口縁部付近はややくぼみ、口縁端部は外反する。摩滅が著しく調整の観察は難しいが、口縁部内外面はヨコナデ調整、底部内外面はナデ調整を施す。京Ⅱ（京都Ⅰ）期新～京Ⅲ（京都Ⅱ）期古に比定され、8世紀末～9世紀前葉のものである。

12は土師器埦Aである。復元口径14.8㎝、残存高2.6㎝を測る。胎土は緻密で焼成はやや良好、色調は10YR7/3にぶい黄橙色を呈する。摩滅が著しく調整の観察は難しいが、口縁部内外面はヨコナデ調整、底部内外面はナデ調整を施す。口縁端部は丸く仕上げる。京Ⅱ（京都Ⅰ）期新～京Ⅲ（京都Ⅱ）期古に比定され、8世紀末～9世紀前葉のものである。

13 は土師器甕 C の口縁部から胴部にかけての破片である。復元口径 20.2 ㎝、残存高 11.8 ㎝を測る。胎土は緻密、焼成はやや良好、色調は 2.5Y8/2 灰白色を呈する。口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は内傾する端面を持つ。胴部は長胴であまり膨らまない。口縁部から頸部にかけての内外面はヨコナデ調整、胴部内外面は斜め方向のハケ目調整を施す。直前期新～京Ⅰ期古に比定され、7世紀中葉～8世紀初頭のものである。

14 は土師器甕 A の口縁部から胴部にかけての破片である。復元口径 27.2 ㎝、残存高 5.2 ㎝である。胎土には少量の砂粒を含み、焼成はやや良好で色調は 10YR7/3 にぶい黄橙色を呈する。口縁端部は外傾する端面を持つ。口縁部内外面はヨコナデ調整、胴部外面は縦方向の粗いハケ目調整、内面は摩滅が著しく観察が困難であるがナデ調整であろう。京Ⅲ（京都Ⅱ）古～新に比定され、9世紀後半のものである。

15 は須恵器坏 A である。復元口径 11.4 ㎝、器高 2.8 ㎝を測る。胎土には砂粒をやや多めに含み、焼成は良好、色調は N4/ 灰色を呈する。底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整、口縁部内外面と底部内面はヨコナデ調整を施す。京Ⅱ（京都Ⅰ）期古～中に比定され、8世紀後葉～9世紀初頭のものである。

16 は須恵器平瓶の口頸部の破片である。復元口径 14.4 ㎝、残存高 9.4 ㎝を測る。胎土は緻密、焼成は良好で、色調は N7/ 灰白色、N5/ 灰色を呈する。頸部外面中ほどに二条の沈線を描き、口縁端部は内傾する端面を持つ。内外面ともにヨコナデ調整を施す。京Ⅱ（京都Ⅰ）期古～中に比定され、8世

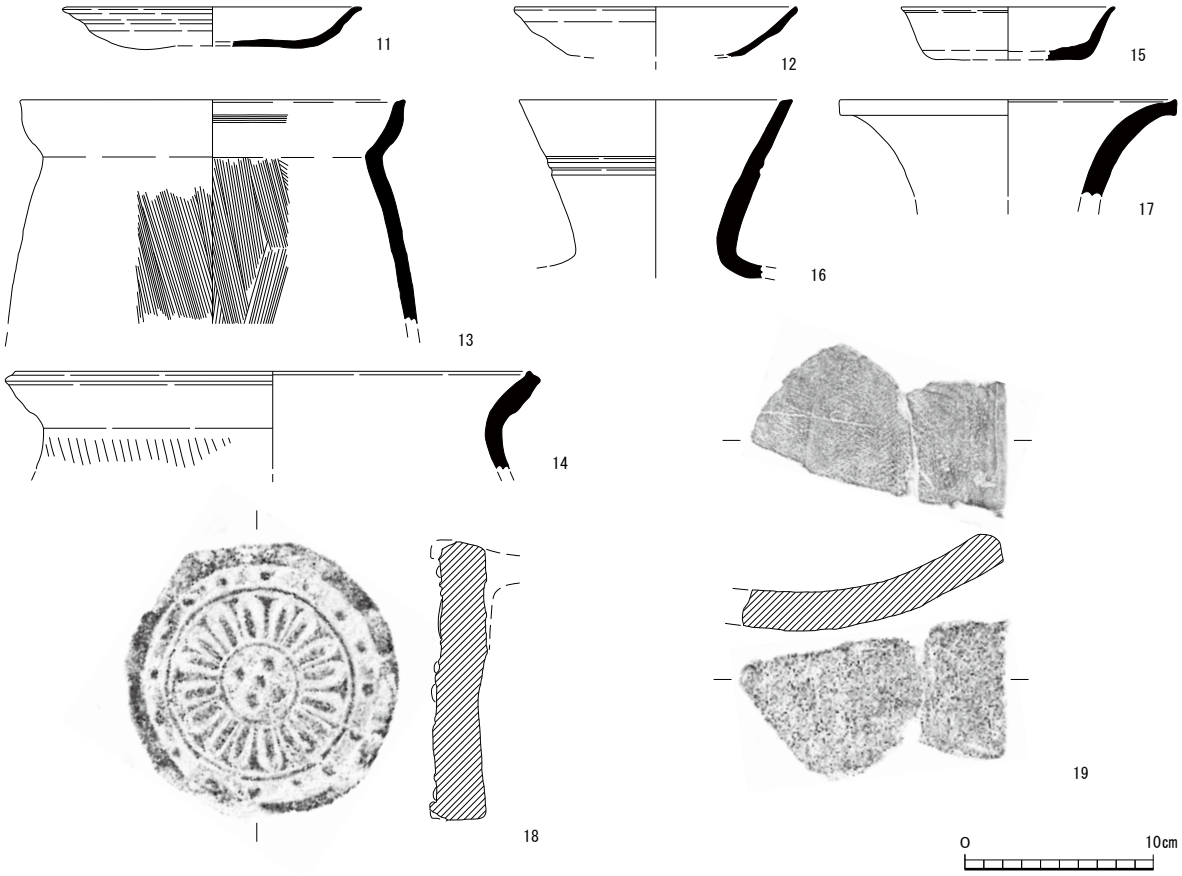


図 25　自然流路 01 出土遺物実測図（1：4）

紀後葉～9世紀初頭のものである。

17 は須恵器壺 N の口頸部の破片である。復元口径 18.9 ㎝、残存高 5.2 ㎝である。胎土は緻密で焼成は良好、色調は N7/ 灰白色を呈する。口縁端部はやや肥厚し上方に摘まみ上げる。口頸部内外面ともにヨコナデ調整を施す。京Ⅱ（京都Ⅰ）期古～中に比定され、8世紀後半以降のものである。

18 は単弁十六葉軒丸瓦である。瓦当径 14.2 ～ 14.3 ㎝、瓦当厚 2.5 ㎝である。胎土は緻密、焼成は良好、瓦当面の色調は 2.5Y2/1 黒色を呈する。突線で画された中房には 1+4 の蓮子を配し、内区には単弁の蓮弁を 16 配す。間弁はＹ字で太いものと細いものと交互に配している。内区と外区は一条の突線で画される。外区文様は連珠紋で 16 の珠紋で構成される。周縁は低い直立縁で文様はない。筒部は剥離しているが取付き位置は外区位置である。瓦当裏面は不定方向のナデ調整、側面もナデ調整を行う。側面には部分的に布目状の痕跡が残る。同范の瓦は現時点では見つかっていないが、よく似た瓦が平安京右京七条一坊二町跡から出土している[18)]。

19 は平瓦である。残存長 6.0 ㎝、残存幅 13.4 ㎝、厚さ 2.0 ㎝を測る。胎土には 0.3 ～ 0.5 ㎝の砂粒を少量含む。焼成はやや良好、凹面の色調は 2.5YR2/1 赤黒色と 2.5YR6/1 赤灰色と 5YR7/2 明褐灰色、凸面の色調は N7/ 灰白色を呈する。側端面が残っており、側端部成形時のヘラケズリを行ったのち凹面側を面取りしている。凹面の布目痕は明瞭に残っており糸切痕も認められる。凸面は摩滅しており縄叩きの痕跡はほとんど認められない。

第 1 遺構面犂溝跡

20 は土師器鍋の口縁部から胴部にかけての破片である。推定口径 29.2 ㎝、残存高 5.9 ㎝である。胎土はやや緻密で焼成はやや良好、色調は 10YR8/2 灰白色である。口縁部外面は摩滅が著しく調整技法は不明、胴部外面には横方向のハケ目調整、部分的に煤の付着が認められる。内面は横方向のナデ調整を施す。口縁端部は丸く仕上げる。京Ⅰ期新～京Ⅱ（京都Ⅰ）古に比定され、8世紀中葉のものである。

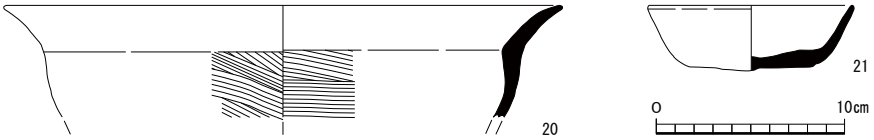


図 26　第1遺構面犂溝出土遺物実測図（1：4）

21 は須恵器坏 A である。口径は 10.4 ㎝、器高は 3.5 ㎝である。胎土は緻密で焼成は良好、色調は口縁部外面が N7/ 灰白色、他は 2.5Y8/2 灰白色を呈する。底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整、口縁部内外面と底部内面はヨコナデ調整を施す。京Ⅰ期古～新に比定され、7世紀後葉～8世紀前葉のものである。

第1層（暗オリーブ褐色粗砂混じりシルト）

22 は須恵器坏 B 蓋である。復元口径 17.2 ㎝、残存高 1.3 ㎝を測る。胎土は緻密、焼成は良好で色調は N7/ 灰白色である。天井部外面は回転ヘラ切後ナデ調整、口縁部内外面と天井部内面はヨコナデ調整を施す。縁部は屈曲する。京Ⅱ（京都Ⅰ）期中に比定され、8世紀末～9世紀初頭のものである。

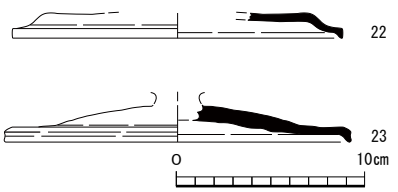


図 27　第1層出土遺物実測図（1:4）

23 は須恵器坏Ｂ蓋である。復元口径は 18.2 ㎝、残存高 1.9 ㎝である。胎土は緻密で焼成は良好である。色調は N7/ 灰白色を呈する。天井部外面は回転ヘラ切後ヨコナデ調整を、天井部内面及び口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。Ⅱ（京都Ⅰ）期中に比定され、８世紀末～９世紀初頭のものである。

第 10 層（灰色粘土　第1遺構面湿地堆積土）

24 は土師器甕Ａの口縁部から胴部にかけての破片である。復元口径 16.4 ㎝、残存高 5.3 ㎝を測る。胎土は緻密で焼成はやや良好、色調は 7.5YR7/4 にぶい橙色で、煤の付着した部分は 2.5Y3/1 黒褐色を呈する。胴部はほとんど張り出さず、頸部から口縁部にかけて大きく外反する。口縁端部は上方に摘まみ上げられている。口頸部内外面はヨコナデ調整、胴部外面はタタキ後ナデ、内面はナデ調整を施す。口縁内部に煤の付着が認められる。京Ⅱ（京都Ⅰ）期新に比定され、９世紀前葉のものである。

25 は土師器甕Ｃの口縁部から胴部にかけての破片である。復元口径 15.8 ㎝で残存高は 9.5 ㎝である。胎土は緻密で焼成は良好、色調は 10YR8/3 浅黄橙色を呈する。胴部は膨らまず口縁部のほうが広い。口縁端部はやや内傾し丸く収める。口頸部外面はヨコナデ調整、内面は横方向のハケ目、胴部外面は斜め方向の粗いハケ目、内面は摩滅が著しく調整の観察は難しいが斜め方向のハケ目調整を施すようである。京Ⅱ（京都Ⅰ）期中に比定され、８世紀末～９世紀初頭のものである。

26 は土師器甕Ｃの口縁部から胴部にかけての破片である。復元口縁径 18.2 ㎝、残存高 15.2 ㎝である。胎土にはやや砂粒を含み、焼成は不良、色調は 10YR8/2 灰白色を呈する。口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は内傾する端面を持つ。胴部は長胴であまり膨らまない。口縁部から頸部にかけての内外面はヨコナデ調整、胴部内外面は斜め方向のハケ目調整を施す。直前期新～京Ⅰ期古に比定され、７世紀中葉～８世紀初頭のものである。

27 は須恵器坏Ｂ蓋である。口径 14.0 ㎝、器高 3.1 ㎝を測る。胎土は緻密、焼成は良好で色調は外

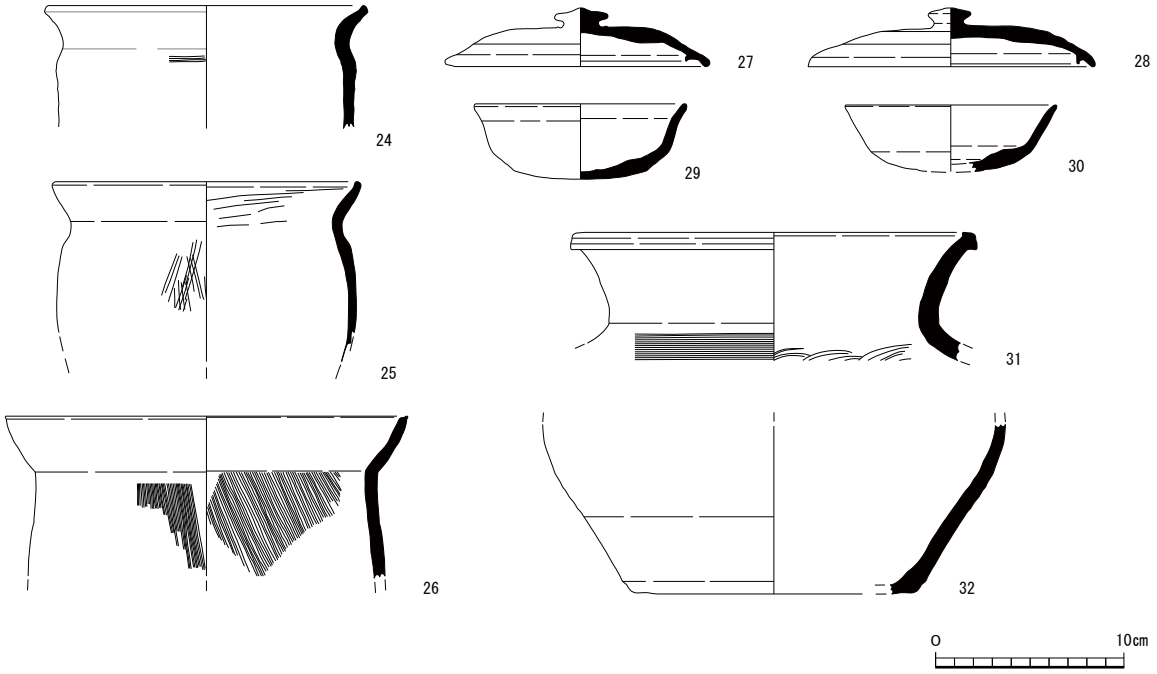


図 28　第 10 層出土遺物実測図（1：4）

面がN6/灰色、内面がN7/灰白色を呈する。扁平な宝珠つまみを持ち、口縁部内面には返りを持つ。天井部外面は回転ヘラ切後3/4に回転ヘラケズリ調整、つまみとその周囲はヨコナデ調整、口縁部内外面と天井部内面はヨコナデ調整を施す。京Ⅰ期古～中に比定され、7世紀後葉～8世紀初頭のものである。

28は須恵器坏B蓋である。口径15.2㎝、器高3.1㎝を測る。胎土は緻密で焼成は良好で色調はN7/灰白色を呈する。ほぼ完形で宝珠つまみを持ち、口縁部内面に返りを持つ。天井部外面は回転ヘラ切後1/2に回転ヘラケズリ調整、つまみとその周囲はヨコナデ調整、口縁部内外面と天井部内面はヨコナデ調整を施す。京Ⅰ期古～中に比定され、7世紀後葉～8世紀初頭のものである。

29は須恵器坏Aである。復元口径11.1㎝、器高4.0㎝を測る。胎土は緻密、焼成は良好で色調はN7/灰白色を呈する。口縁部がやや外反する。底部外面は回転ヘラ切後未調整で、口縁部内外面と底部内面はヨコナデ調整を施す。京Ⅰ期古～中に比定され、7世紀後葉～8世紀初頭のものである。

30は須恵器坏Aである。復元口径11.2㎝、器高3.6㎝を測る。胎土は緻密で焼成は良好、色調は5Y7/1灰白色を呈する。底部外面は回転ヘラ切後未調整で、口縁部内外面と底部内面はヨコナデ調整を施す。京Ⅰ期古～中に比定され、7世紀後葉～8世紀初頭のものである。

31は須恵器甕Aの口縁部から肩部にかけての破片である。復元口径21.2㎝、残存高6.8㎝である。胎土は緻密で焼成は良好、色調はN7/灰白色を呈する。頸部は外反し、口縁端部は外傾する端面を持つ。口縁から頸部にかけてはヨコナデ調整を施す。肩部外面はカキ目調整、内面には当て具の痕跡が残る。京Ⅰ期古～中に比定され、7世紀後葉～8世紀初頭のものである。

32は須恵器鉢の底部から肩部にかけての破片である。復元底径15.0㎝、残存高8.9㎝を測る。胎土は緻密で焼成は良好、色調はN7/灰白色を呈する。底部は平らで内外面ともにヨコナデ調整を施す。京Ⅱ（京都Ⅰ）期新に比定され、9世紀前葉のものである。

第12層（浅黄色極細粒砂混じりシルト　第1遺構面ベース土）

33は土師器甕Cの口縁部から胴部にかけての破片である。推定口径は17.4㎝、残存高は15.0㎝である。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は不良、色調は10YR8/3浅黄橙色を呈する。口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は内傾する端面を持つ。胴部は長胴であまり膨らまない。全体に摩滅が著しく調整技法については観察できなかった。直前期新～京Ⅰ期古に比定され、7世紀中葉～8世紀初頭のものである。

34は須恵器坏B蓋である。復元口径は15.2㎝、器高は3.1㎝である。胎土は緻密で焼成は良好、色調はN7/灰白色を呈する。上面が平らなやや大きめのつまみを持ち、口縁部には返りを持つ。天井部外面は回転ヘラ切後1/2に回転ヘラケズリ調整、つまみとその周囲はヨコナデ調整、口縁部内外面と天井部内面はヨコナデ調整を施す。京Ⅰ期古～中に比定され、7世紀後葉～8世紀初頭のものである。

35は須恵器坏Aである。一部欠損しているが完形に近い状態で出土している。口径10.4㎝、器高3.1㎝である。胎土は緻密で焼成は良好、色調はN6/灰色を呈する。口縁部がやや外反する。底部外面は回転ヘラ切後未調整で、口縁部内外面と底部内面はヨコナデ調整を施す。京Ⅰ期古～中に比定され、7世紀後葉～8世紀初頭のものである。

36は須恵器坏Aである。口径11.2㎝、器高3.7㎝を測る。一部欠損しているがほぼ完形で全体的に

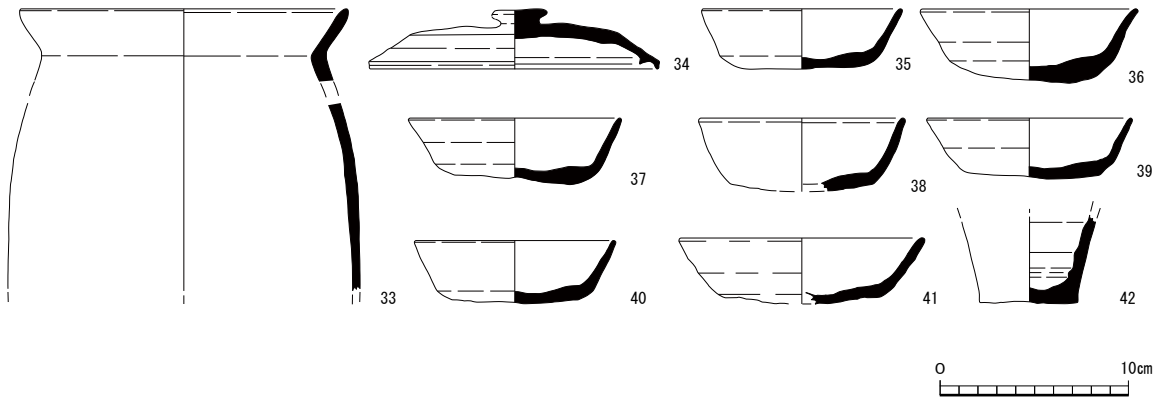


図 29　第 12 層出土遺物実測図（1：4）

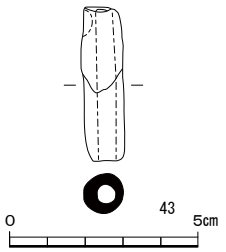


図 30　第 12 層出土土錘実測図（1：2）

歪んでいる。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は良好、色調は N6/ 灰色を呈する。底部外面は回転ヘラ切後ナデ調整、口縁部内外面と底部内面はヨコナデ調整を施す。京Ⅰ期古～中に比定され、7世紀後葉～8世紀初頭のものである。

37 は須恵器坏 A である。一部欠損があるがほぼ完形で全体的に歪む。口径 11.0 ㎝で、器高 3.2 ～ 3.6 ㎝である。胎土は緻密、焼成は良好、色調は N7/ 灰白色を呈する。底部外面は回転ヘラ切後ナデ調整、口縁部内外面と底部内面はヨコナデ調整を施す。京Ⅰ期古～中に比定され、7世紀後葉～8世紀初頭のものである。

38 は須恵器坏 A である。復元口径 10.6 ㎝、器高 3.8 ㎝である。胎土は緻密で焼成は良好、色調は N7/ 灰白色を呈する。底部外面は回転ヘラ切後ナデ調整、口縁部内外面と底部内面はヨコナデ調整を施す。京Ⅰ期古～中に比定され、7世紀後葉～8世紀初頭のものである。

39 は須恵器の坏 A である。口径 10.8 ㎝、器高 3.0 ～ 3.1 ㎝を測る。胎土は緻密で焼成は良好、色調は N7/ 灰色を呈する。全体的に歪みが生じている。底部外面は回転ヘラ切後ナデ調整、口縁部内外面と底部内面はヨコナデ調整を施す。京Ⅰ期古～中に比定され、7世紀後葉～8世紀初頭のものである。

40 は須恵器坏 A である。復元口径 10.4 ㎝、器高 3.2 ㎝を測る。胎土は緻密で焼成は良好、色調は N7/ 灰白色を呈する。全体的に歪みが生じている。底部外面は回転ヘラ切後ナデ調整、口縁部内外面と底部内面はヨコナデ調整を施す。京Ⅰ期古～中に比定され、7世紀後葉～8世紀初頭のものである。

41 は須恵器坏 A である。口径 12.1 ㎝、器高 3.4 ㎝を測る。胎土は緻密で焼成は不良、色調は 2.5Y8/2 灰白色を呈する。底部外面は回転ヘラ切後ナデ調整、口縁部内外面と底部内面はヨコナデ調整を施す。京Ⅱ（京都Ⅰ）中に比定され、8 世紀末～9世紀初頭のものである。

42 は須恵器壺 G である。底径 10.7 ㎝、器高 3.8 ㎝を測る。胎土は緻密で焼成は良好、色調は 10G5/1 緑灰色を呈する。底部から胴部下半の破片である。底部外面は回転糸切後未調整、胴部内外面と底部内面はヨコナデ調整を施す。京Ⅱ（京都Ⅰ）中に比定され、8世紀末のものである。

43 は土師質の土錘である。直径 0.95 ㎝、長さ 4.05 ㎝、穴の直径 0.4 ～ 0.45 ㎝である。胎土は緻密で焼成は良好、色調は 7.5YR7/6 橙色を呈する。両端のすぼまりがあまりなく、円柱形を呈する。部分的

に指押さえの痕跡が残る。詳細な年代は不明である。

第 13 層（灰白色粘土　第2遺構面湿地堆積土）

44 は土師器皿 AA である。復元口径 21.6 ㎝、器高 2.8 ㎝を測る。胎土には少量の砂粒が含まれ、焼成は良好、色調は 10YR7/3 にぶい黄橙色を呈する。摩滅が著しいが口縁部から側面にかけては横方向のナデ調整を行う。京Ⅱ（京都Ⅰ）中に比定され、8世紀末のものである。

45 は土師器高坏の脚部の破片である。残存高 8.1 ㎝である。胎土は緻密で焼成は良好、色調は 7.5YR7/4 にぶい橙色を呈する。脚部は縦方向のヘラケズリを 10 面にわたって施している。脚内は中空で坏内面底部はナデ調整を施す。京Ⅱ（京都Ⅰ）中に比定され、8世紀末のものである。

46 は土師器鍋の把手である。把手の長さは 5.8 ㎝、最大幅は 6.5 ㎝である。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は不良、色調は 10YR8/3 浅黄橙色を呈する。把手上面に、器壁に対して直行方向にヘラ状工具の小口の刃部を2ヵ所で刺突している。表面の摩滅が著しく、調整加工は不明である。詳細な時期は不明であるが、おそらく8世紀代のものであろう。

47 は須恵器坏 H 蓋である。復元口径 10.8 ㎝、器高 3.8 ㎝を測る。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は良好、色調は N5/ 灰色を呈する。天井部外面は回転ヘラ切後未調整で、口縁部内外面と天井部内面はヨコナデ調整を施す。直前期中～新に比定され、7世紀前葉～中葉のものである。

48 は須恵器坏 H 蓋である。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は良好、色調は N5/ 灰色を呈する。天井部外面は回転ヘラ切後 1/ 2を回転ヘラ削り調整を、口縁部内外面と天井部内面はヨコナデ調整を施す。直前期中～新に比定され、7世紀前葉～中葉のものである。

49 は須恵器坏 H 身である。復元口径 10.3 ㎝、器高 3.0 ㎝を測る。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は良好、色調は 7.5YR6/2 灰褐色を呈する。底部外面は回転ヘラ切後ナデ調整で、口縁部内外面と

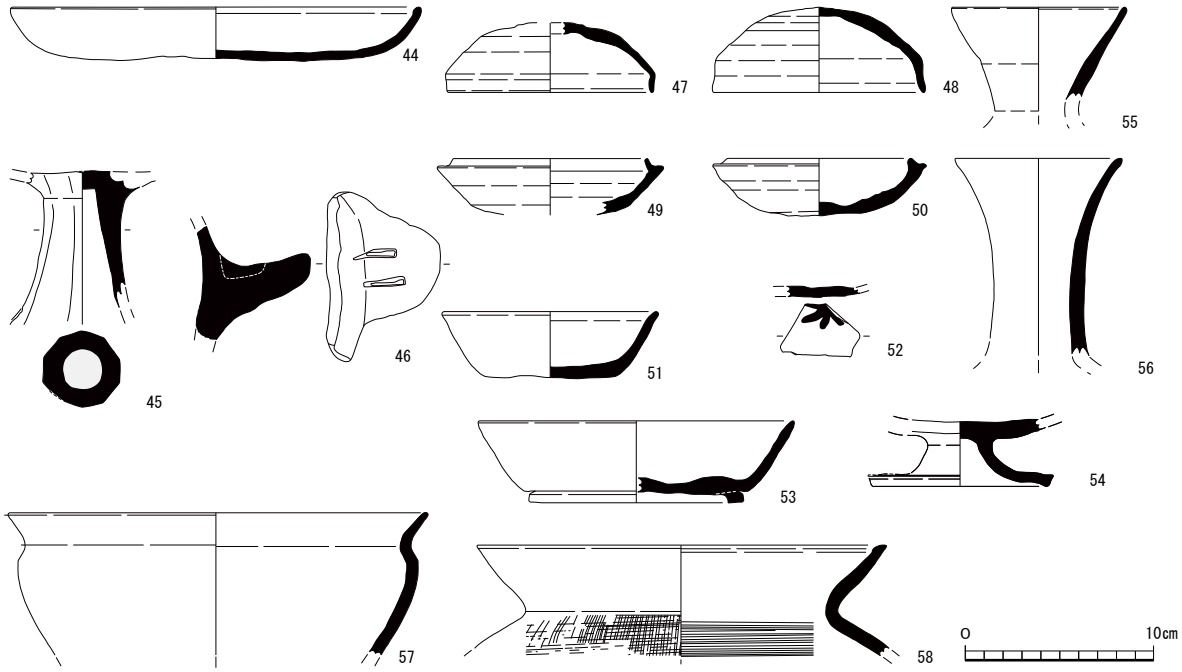


図 31　第 13 層出土遺物実測図（1：4）

天井部内面はヨコナデ調整を施す。直前期中～新に比定され、7世紀前葉～中葉のものである。

50は須恵器坏H身である。復元口径9.6㎝、器高3.0㎝を測る。胎土は少量の砂粒を含み、焼成は良好、色調はN3/暗灰色を呈する。底部外面は回転ヘラ切後ナデ調整で、口縁部内外面と天井部内面はヨコナデ調整を施す。直前期中～新に比定され、7世紀前葉～中葉のものである。

51は須恵器坏Aである。口径10.8㎝、器高3.7㎝を測る。胎土は緻密で焼成は良好、色調はN7/灰白色を呈する。全体的に歪みを生じている。底部外面は回転ヘラ切後ナデ調整で、口縁部内外面と底部内面はヨコナデ調整を施す。京Ⅰ期古～中に比定され、7世紀後葉～8世紀初頭のものである。

52は須恵器坏Aの底部の破片である。胎土は緻密で焼成は良好、色調はN7/灰白色を呈する。底部外面に墨書がある。欠損しているため墨書の一部が残るのみでどのような字であったか推定の域を出ないが、現状では「不」と読めそうである。細片であるため時期は不明である。

53は須恵器坏Bである。復元口径16.6㎝、器高4.3㎝、高台径11.4㎝である。胎土は緻密で焼成は良好、色調はN7/灰白色を呈する。高台とその周囲はヨコナデ調整、底部外面は回転ヘラ切後ナデ調整で、口縁部内外面と底部内面はヨコナデ調整を施す。高台は張り付け高台である。内面は転用硯として利用されていた。京Ⅰ期中に比定され、8世紀前葉のものである。

54は須恵器高坏である。残存高3.6㎝、脚底径9.4㎝を測る。胎土は緻密で焼成はやや良好、色調は外面がN6/灰色で内面はN7/灰白色を呈する。坏部及び脚部内外面はヨコナデ調整を施す。脚は短脚でやや歪む。直前期新～京Ⅰ期古に比定され、7世紀代のものである。

55は須恵器平瓶の口頸部である。口径9.2㎝で残存高は5.7㎝である。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は良好、色調はN7/灰白色、自然釉は5Y6/2灰オリーブ色を呈する。内外面ともにヨコナデ調整を施す。やや歪みがあり内外面全体に自然釉がかかる。直前期中～新に比定され、7世紀前葉～中葉のものである。

56は須恵器壺Kの口頸部である。口径8.8㎝、残存高10.4㎝を測る。胎土は緻密で焼成は良好、色調はN7/灰白色を呈する。内外面ともにヨコナデ調整を施す。外面の一部に自然釉がかかり、全体にやや歪む。京Ⅰ期中～新に比定され、8世紀前半のものである。

57は須恵器鉢である。口径22.4㎝、残存高7.5㎝を測る。胎土は緻密で焼成は良好、色調は2.5YR7/1明赤灰色を呈する。口縁部から胴部内外面はヨコナデ調整を施す。京Ⅰ期中～新に比定され、8世紀前半のものである。

58は須恵器甕である。口径21.6㎝、残存高5.8㎝を測る。胎土は緻密で焼成は良好、色調はN7/灰白色を呈する。口頸部内外面はヨコナデ調整、胴部外面はタタキ痕、内面は当て具痕の上からカキ目調整を施す。京Ⅰ期中～新に比定され、8世紀前半のものである。

第27層（浅黄色極細粒砂　第2遺構面ベース土）

60は須恵器坏Bである。残存高は1.9㎝、高台径13.4㎝を測る。胎土は緻密で焼成は良好、色調はN7/灰白色を呈する。底部外面は回転ヘラ切後ナデ調整、その他はヨコナデ調整を施す。高台は張り付け高台である。底部外面は転用硯として利用されていた。京Ⅰ期中～新に比定され、8世紀前半のものである。

60と61は土師質の土錘である。

60は直径1.2㎝、長さ2.2㎝、穴の直径は0.35～0.5㎝である。通常にみられる土錘と比較すると長さが随分と短くまた円筒形である。胎土は緻密で焼成はやや不良、色調は10YR8/3浅黄橙色を呈する。

61は直径1.1㎝、長さ2.5㎝、穴の直径0.4㎝を測る。これも通常にみられる土錘に比べ長さが短い。またこれも円筒形を呈する。胎土は緻密で焼成は良好、色調は7.5YR8/3浅黄橙色を呈する。詳細な年代は不明である。

図32　第27層出土遺物実測図（1：4）

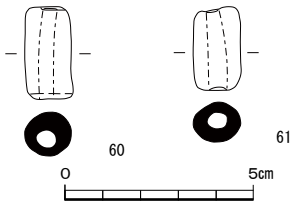


図33　第27層出土土錘実測図（1：2）

3）木製品

井戸01曲物

62～64は井戸01の曲げ物の井戸枠の一部である。外面に1.0㎝前後の間隔で縦方向の1㎜ほどの細い刻み目を入れる。

62は最大幅26.4㎝、厚さ0.5～0.7㎝、縦14㎝を測る。材質はスギ材である。

63は最大幅55.0㎝、厚さ1.0㎝、縦18.2㎝を測る、曲げ物の井戸枠である。外面に刻み目を入れる。材質はスギ材である。

64は幅10.4㎝、厚さ1.0㎝、長さ66.0㎝の曲げ物の井戸枠の一部である。外面に刻み目がある。材質はスギ材である。

井戸01縦板

65～70は井戸01の曲げ物の井戸枠の外側に枠と接するように立てられていた板である。板と板を連結した痕跡は認められず、曲げ物の井戸枠と密着していたことから、井戸枠を据える際に掘方の土の崩落を防ぐために立てかけられた板と考えられる。

65は幅15.0㎝、厚さ1.5～2.0㎝、残存長34.5㎝である。材質はスギ材である。

66は幅13.2㎝、厚さ1.2～1.8㎝、残存長32.4㎝である。材質はスギ材である。

67は幅13.5㎝、厚さ1.3～1.6㎝、残存長26.7㎝である。材質はスギ材である。

68は幅23.1㎝、厚さ3.0～3.6㎝、残存長33.0㎝である。材質はモミ属の樹木である。

69は幅21.5～25.2㎝、厚さ3.1～4.1㎝、残存長30.2㎝である。材質はスギ材である。

70は幅33.6㎝、厚さ1.8～3.0㎝、縦23.0㎝～34.4㎝を測る。外面には鑿痕が明瞭に残る。材質はスギ材である。

第2遺構面湿地跡出土木製品

71～79は第2遺構面湿地跡から出土した木製品である。多くは建築部材と見られる。

71は最大径5.5㎝、長さ122.0㎝の杭である。材質はスギ材である。

72は幅2.4㎝、厚さ2.3㎝、長さ50.1㎝の角材である。材質はスギ材である。

73は幅5.2㎝、厚さ2.5㎝、長さ81.1㎝、長さ81.1㎝である。材質はカヤ材である。

74 は最大径 3.6 ㎝、長さ 81.0 ㎝の杭である。材質はスギ材である。

75 は幅 6.5 ㎝、厚さ 3.3 ㎝、長さ 63.6 ㎝の角材である。材質はカヤ材である。

76 は幅 7.2 ㎝、厚さ 0.5 ～ 0.7 ㎝、残存長 56.0 ㎝の板材である。材質はスギ材である。

77 は幅 8.8 ㎝、厚さ 8.0 ㎝、長さ 162.0 ㎝のほぞ穴を持つ角材である。建築部材と見られる。材質はネズコ材の可能性が高い。

78 は幅 15.2 ㎝、厚さ 2.0 ㎝、長さ 162.4 ㎝の板材である。材質はスギ材である。

79 は幅 11.4 ～ 13.8 ㎝、厚さ 4.2 ～ 8.7 ㎝、長さ 60.0 ㎝を測る。穴があるが恐らくは節の抜けた後と見られ自然木の可能性が高い。材質はネズコ材と思われる。

註

18)『平安京右京七条一坊二・四・七・八町跡、御土居跡、堂ノ口遺跡』京都市埋蔵文化財研究所　2018 年

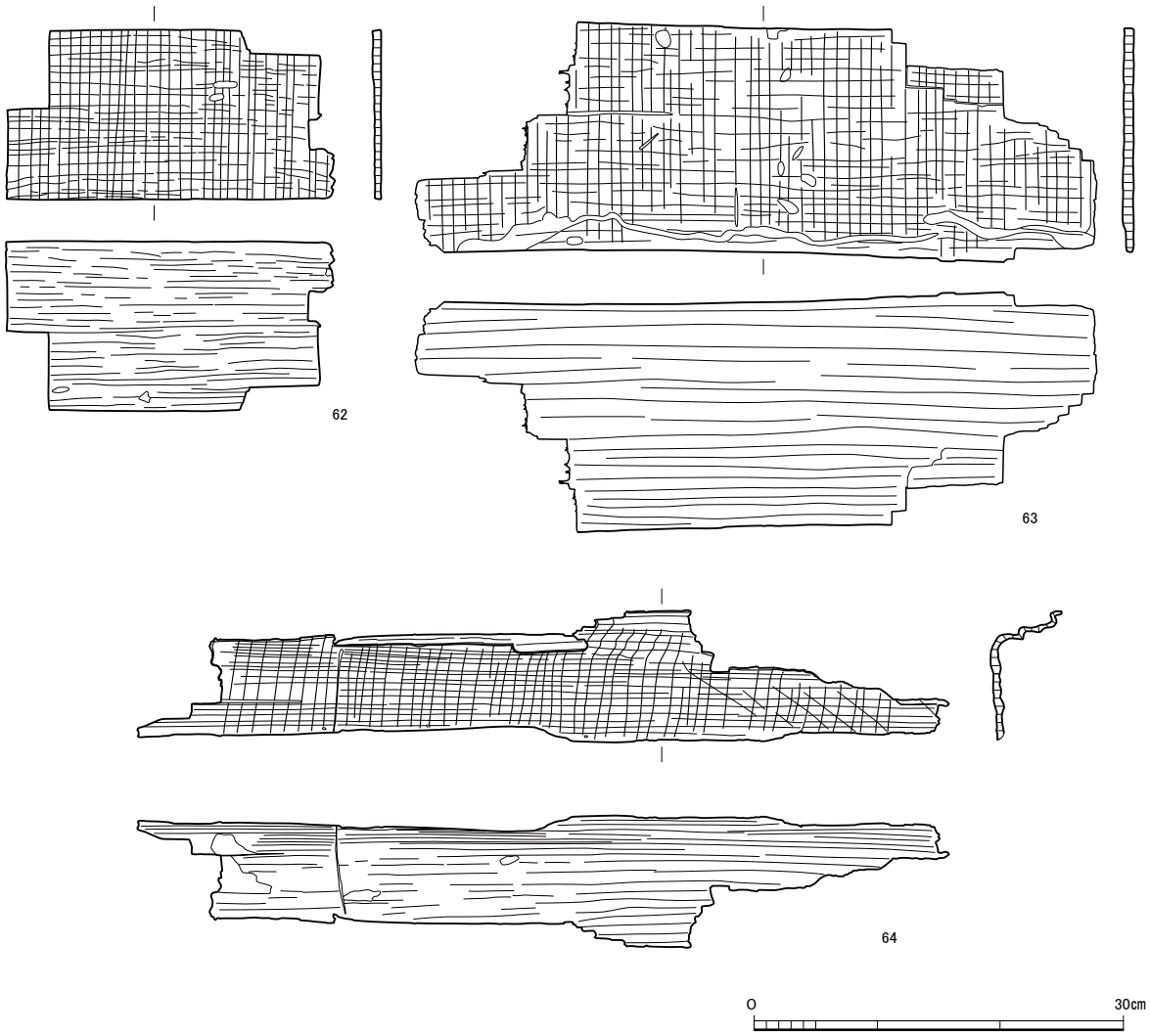


図 34　井戸 01 曲げ物の井戸枠（1：6）

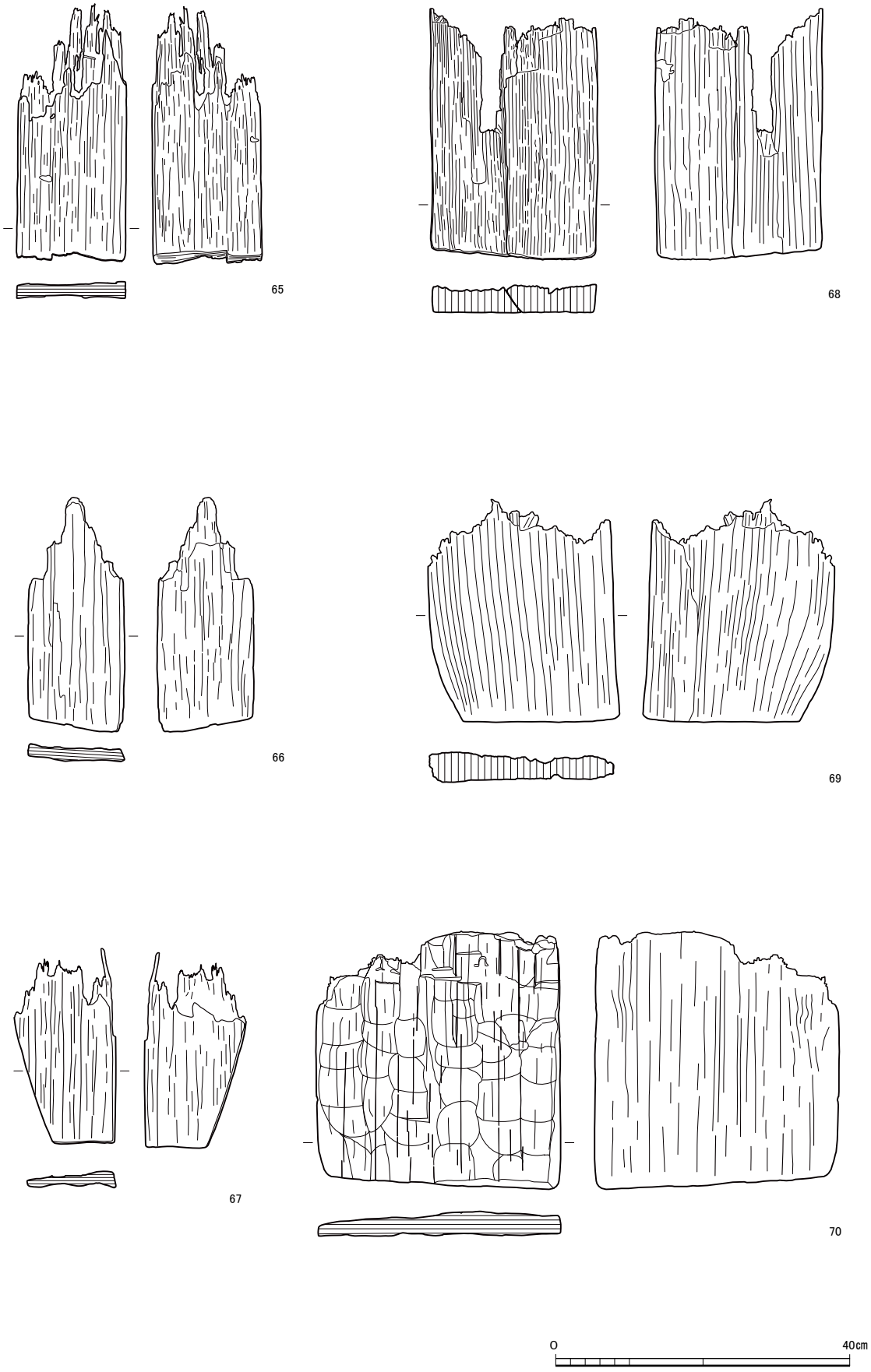


図 35　井戸 01 井戸枠外の縦板（1：8）

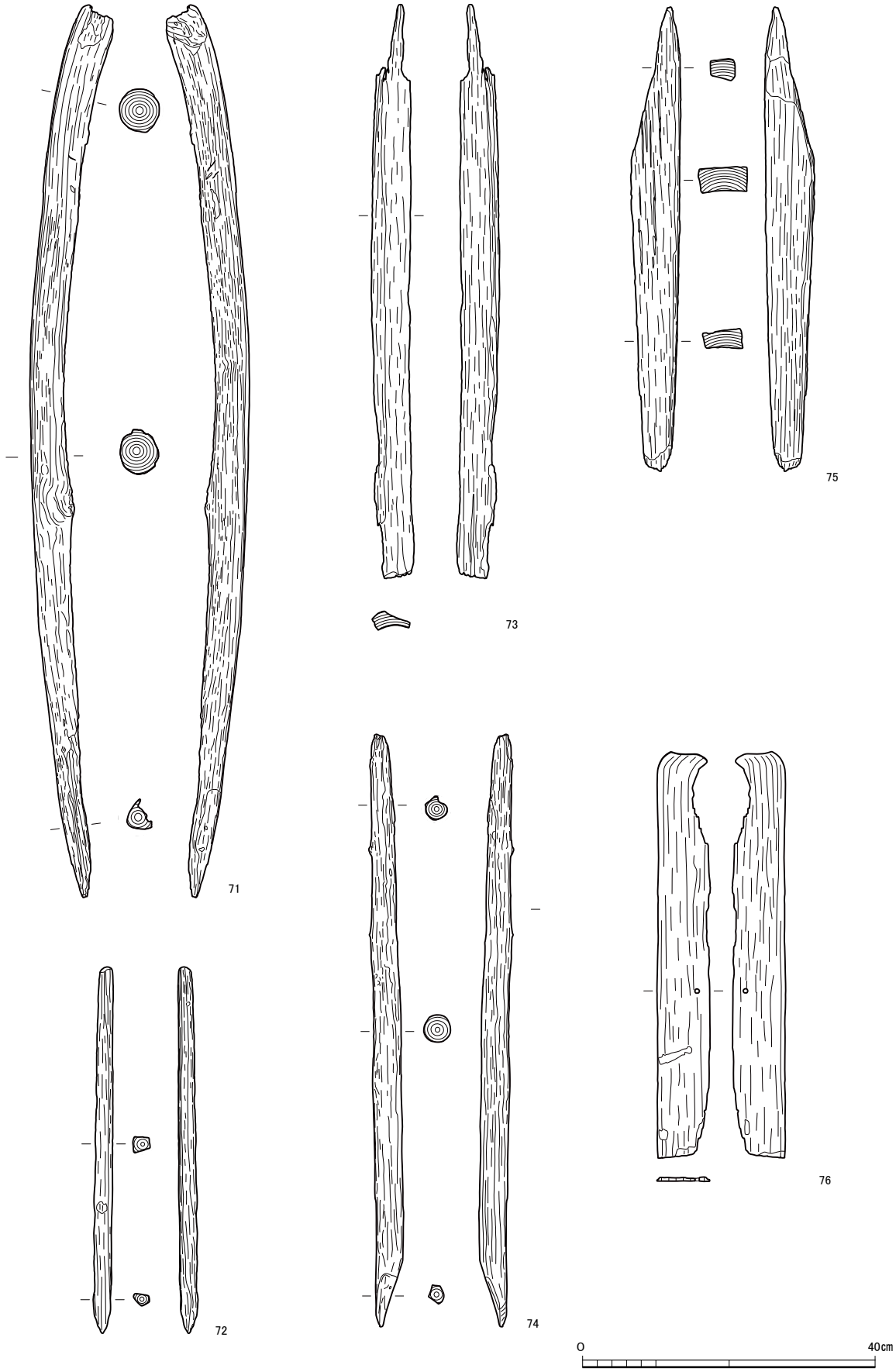


図 36　第2遺構面湿地跡出土の木製品1（1：8）

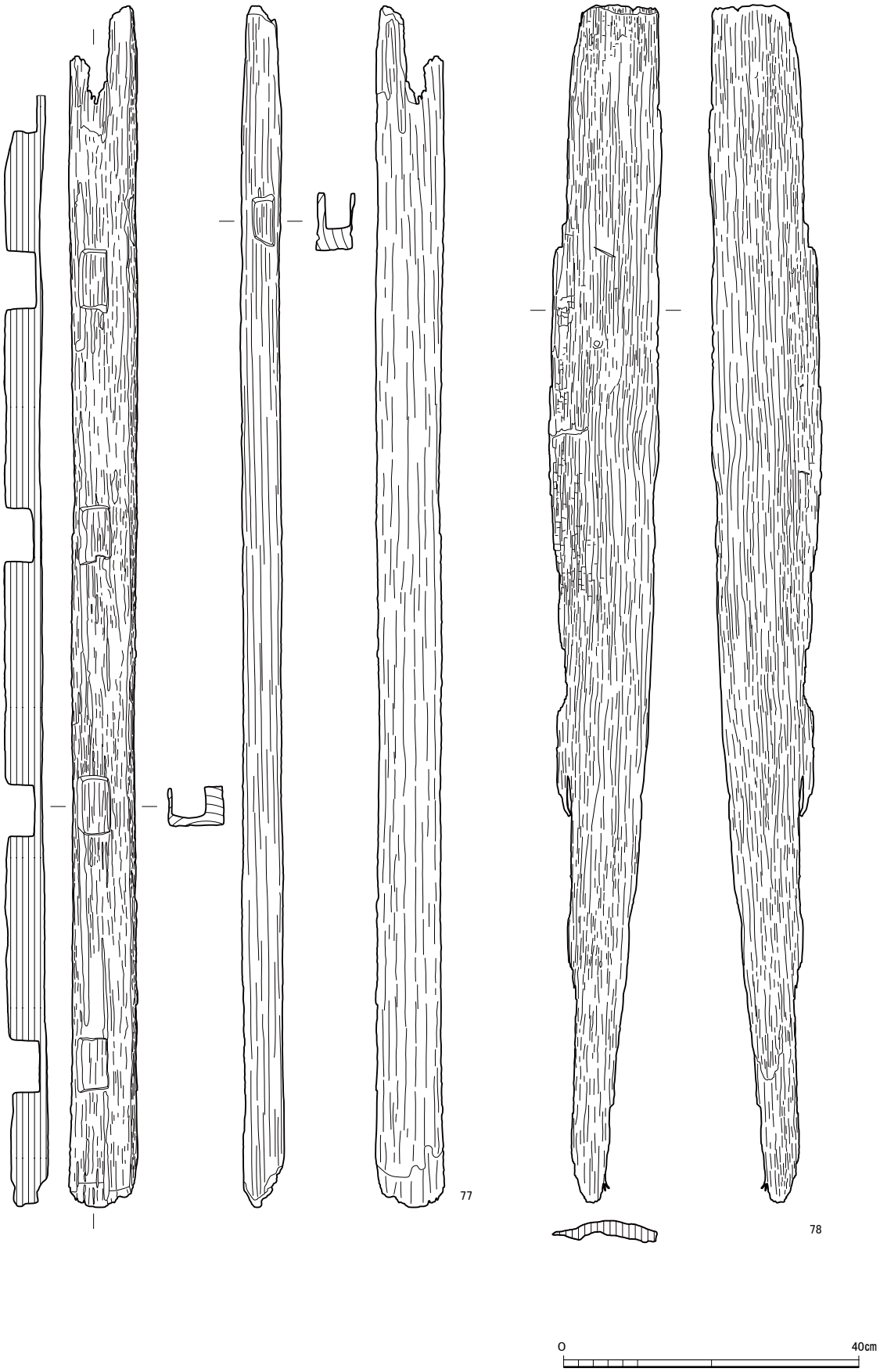


図 37　第2遺構面湿地跡出土の木製品2（1：8）

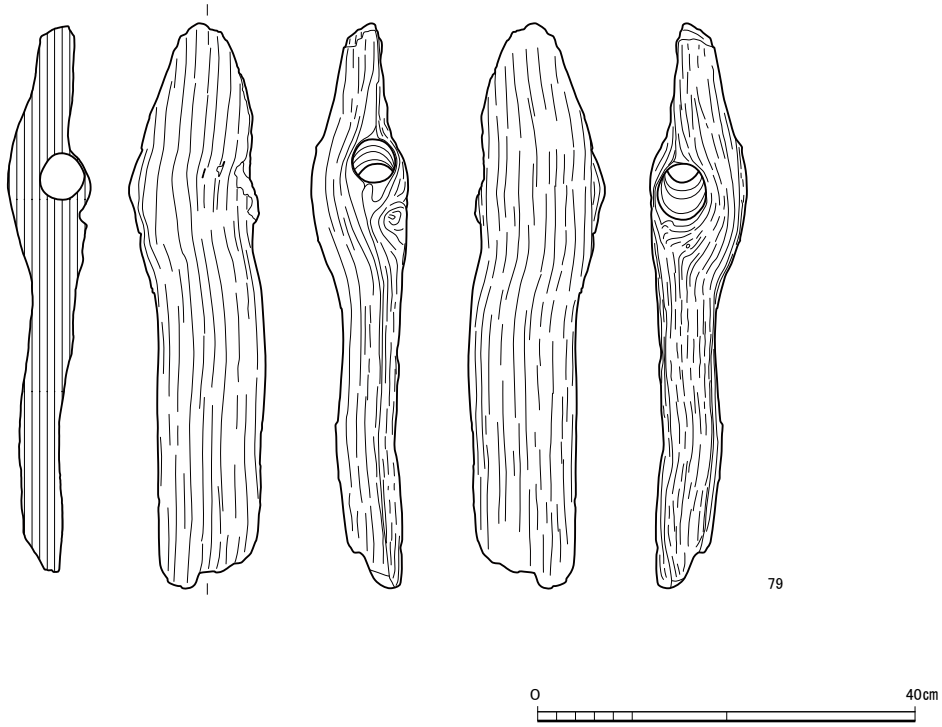


図 38　第2遺構面湿地跡出土の木材（1：8）

第4章　まとめ

今回の調査では第1遺構面で平安時代前期の針小路北側溝と築地内溝とみられる遺構を、第2遺構面では平安時代初頭の井戸と土壙を検出した。また第1遺構面及び第2遺構面で湿地跡を検出した。

第1遺構面ベース土は浅黄色極細粒砂混りシルト（第 12 層）で、この層は自然に堆積したものではなく、土地を平らにするために造成・整地されたと考えられる。特に、浅黄色極細粒砂混りシルト層（第 12 層）からは7世紀後半～8世紀末の遺物が出土している。その中で最も新しいものが須恵器壺 G（第 29 図 42）である。

須恵器壺Gは8世紀後半の平城宮第Ⅴ期に出現し、長岡京期に盛行して、平安時代初期の9世紀初頭には姿を消す寿命の短い土器である。主な生産地は静岡県の花坂島橋窯と助宗窯である。本製品は山中章氏の細型第Ⅰ形式b類に相当し、784 ～ 794 年頃のものと考えられる[19]。したがって、浅黄色極細粒砂混りシルト層（第 12 層）は 794 年以降の平安遷都後整地されたものと考えられる。

さらに、第 12 層の一部は、古墳時代後期～奈良時代の湿地堆積土の灰白色粘土（第 13 層）の上に堆積することから、針小路の築地塀を築くために湿地の一部を埋めて整地されたことがわかった。針小路北側溝と築地内側溝の間隔から築地と犬走の幅はおよそ 1.5 mとみられる。溝 01 は出土遺物から 9 世紀の中ごろまでは機能していたと考えられる。

第2遺構面の井戸 01 は、平安京造営に伴う時期のもので、井戸枠内から出土した土師器皿 AA・土師器皿 C・須恵器坏 B 蓋はほとんど時期差を感じることなく、京Ⅱ（京都Ⅰ）期中に比定され、8世紀末のものと考えている。遺物の出土状況から井戸 01 は短期間に使用されたと考えられることや、調査地内には掘立柱建物などが検出されておらず日常生活の痕跡がみられないことから、条坊施工に携わる工人のために掘削された井戸ではないかと推測している。工人たちは、この地域で7～8世紀頃の遺物を含む浅黄色極細粒砂混りシルト層（第 12 層）を客土として盛土を行い、客土の最終段階で井戸 01 は埋められ、盛土が完了した段階で溝 01 と溝 02 が掘削された。

また、調査地北側の湿地跡は、右京八条二坊の東半域から九条二坊の東北地域の広範囲に確認されている湿地堆積層の南端であると考えられる[20]。したがって、条坊地割施工時も湿地帯は存在しており、施工中に岩石などを掘り込んでいたとみられるが、最終的には自然に埋まるまで様子を見ていたようである。

先にも述べたが、本調査地では人の日常生活の痕跡がほとんどみられず、条坊地割施工されたものの低湿なこともあり人は住まず、中世以降には耕作地として利用されたようである。

註

19）山中章「桓武朝の新流通構造－壺 G の生産と流通－」『古代文化』第 49 巻第 11 号　古代學教會　1997 年

20）「右京八条二坊五町」『京都市内遺跡立会調査概報　平成4年度』　京都市文化観光局　1993 年

第5章　平安京右京九条二坊八町跡出土木製品の樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1）はじめに

本分析調査では、平安京右京九条二坊八町跡（京都府京都市所在）の発掘調査で出土した木製品の樹種同定を実施し、当時の木材利用に関する資料を作成する。

2）試料

試料は、流路から出土した杭等の部材や井戸枠等の木製品 18 点である。詳細は、結果とともに表 1 に示す。

3）分析方法

剃刀を用いて、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の各切片を、木製品の目立たない場所から採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、光学顕微鏡（使用機器；Nikon E600）で木材組織の種類や配列を観察する。木材組織の特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

4）結果

結果を表1に示す。針葉樹4分類群（カヤ、モミ属、スギ、ネズコ?）に同定された。スギが 13 点と圧倒的に多く、次いでカヤ（遺物 No.73、74）とネズコ？（遺物 No.78、79）が各2点、モミ属（遺物 No.69）が1点である。

以下、各分類群の解剖学的特徴を述べる。

・カヤ（Torreya nucifera Sieb. et Zucc.） イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、樹脂道および樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭く、年輪幅全体も狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。2点ともにあて材のため不明瞭だが、一部の仮道管内壁に対をなしたらせん肥厚がみられることから、カヤとした。

・モミ属（Abies） マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型。放射組織は単列で、細胞高が高い（20 以上）ものが散見される。

・スギ（Cryptomeria japonica (L.f.)D.Don） スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急であ

る。晩材部の幅は比較的広く、細胞壁が緻密で硬い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2個が多い。放射組織は単列、1～ 10 細胞高。

・ネズコ？（Tsuja standishii (Gord.) Carriere?） ヒノキ科ネズコ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型？で1分野に2～4個。放射組織は単列、1～ 15 細胞高。一部にインデンチャーを確認。いずれもあて材で、放射組織、分野壁孔が不明瞭なため、疑問符「?」を付している。

遺物N o.	地区名	層位・遺構面	備考	同定結果
62	南区	第2遺構面	井戸枠	スギ
63	南区	第2遺構面	井戸枠	スギ
64	南区	第2遺構面	井戸枠	スギ
65	南区	第2遺構面	井戸枠	スギ
66	南区	第2遺構面	井戸枠	スギ
67	南区	第2遺構面	井戸枠	スギ
68	南区	第2遺構面	井戸枠	スギ
69	南区	第2遺構面	井戸枠	モミ属
70	南区	第2遺構面	井戸枠	スギ
71	北区	第2遺構面	木製品取り上げ 01	スギ
72	北区	第2遺構面	木製品取り上げ 10	スギ
73	北区	第2遺構面	木製品取り上げ 02	カヤ
74	北区	第2遺構面	木製品取り上げ 09	カヤ
75	北区	第2遺構面	木製品取り上げ 07	スギ
76	南区	第2遺構面	井戸枠	スギ
77	北区	第2遺構面	木製品取り上げ 04	スギ
78	北区	第2遺構面	木製品取り上げ 06	ネズコ？
79	北区	第2遺構面	木製品取り上げ 05	ネズコ？

表 2　樹種同定結果表

5）考察

出土木製品は、針葉樹4分類群（カヤ、モミ属、スギ、ネズコ？）が同定され、スギが圧倒的に多い組成を示した。伊東・山田編（2012）の出土木製品用材データベースによれば、いずれの分類群も、これまでの京都府内における出土例が確認されている。また、北近畿の山野に自生可能であることから、当時の遺跡周辺の森林から採取した可能性も考えられる。

井戸枠は、遺物 No.69 の1点のみモミ属である他は、全てスギである。スギは加工が容易で水湿に強く、真っ直ぐな材を得やすいことから、井戸材として適している。伊東・山田編（2012）によれば、京都府内で出土した古代～中世の井戸材の殆どがスギとヒノキである。モミ属も軽軟で加工も容易であり、直線的で太い木材が得やすいため、井戸材として適する。古代～中世にかけて、モミを井戸材として使用する例

は北近畿地方で散見されるが、伊東・山田編(2012)によれば、中世以降その割合が増加する傾向がみられる。

流路から出土した杭材等の木質遺物も全て針葉樹である。カヤは、針葉樹の中では重硬で、加工しやすく耐朽性に富む。水湿にも強いことから、船舶材に用いられることがあるほか、緻密で美しいことから、器具材や彫刻材として用いられる。ネズコは軽軟で加工しやすく、建具材や器具材に用いられることが多い。伊東・山田編(2012)によれば、杭材等は周辺に生育していた木材を利用することが多いため、雑多な組成になることが多い。しかし、今回は全て有用な針葉樹であることから、建築材等から転用された可能性等がある。

引用文献

林　昭三,1991,日本産木材顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所.66-176.

伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.

伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学　出土木製品用材データベース.海青社,449p.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006,針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）,海青社,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.

島地　謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998,広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）,海青社,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

図　　版

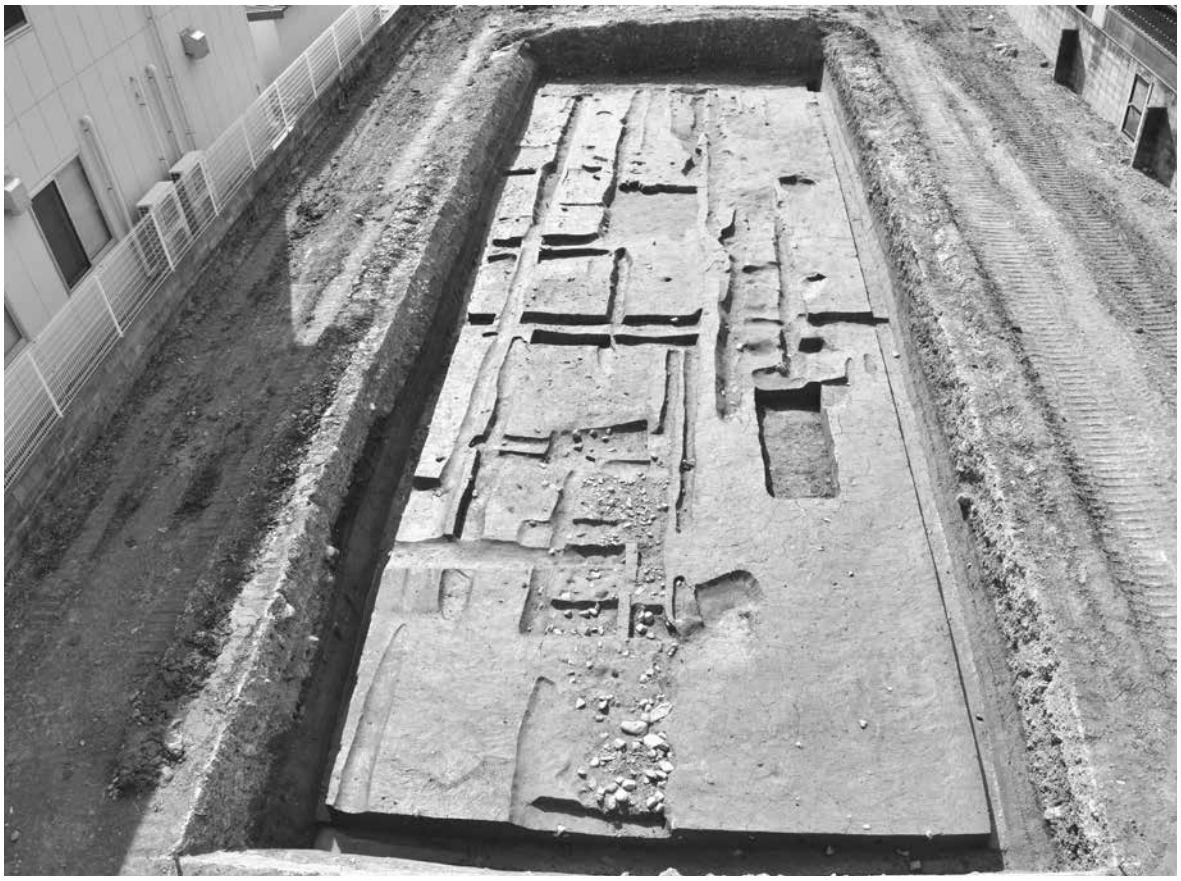
北・南区第1遺構面オルソ合成写真(1：200)

北・南区第２遺構面オルソ合成写真（1：200）

1　南区第1遺構面全景（北から）

2　南区第2遺構面全景（北から）

図版4　遺構4



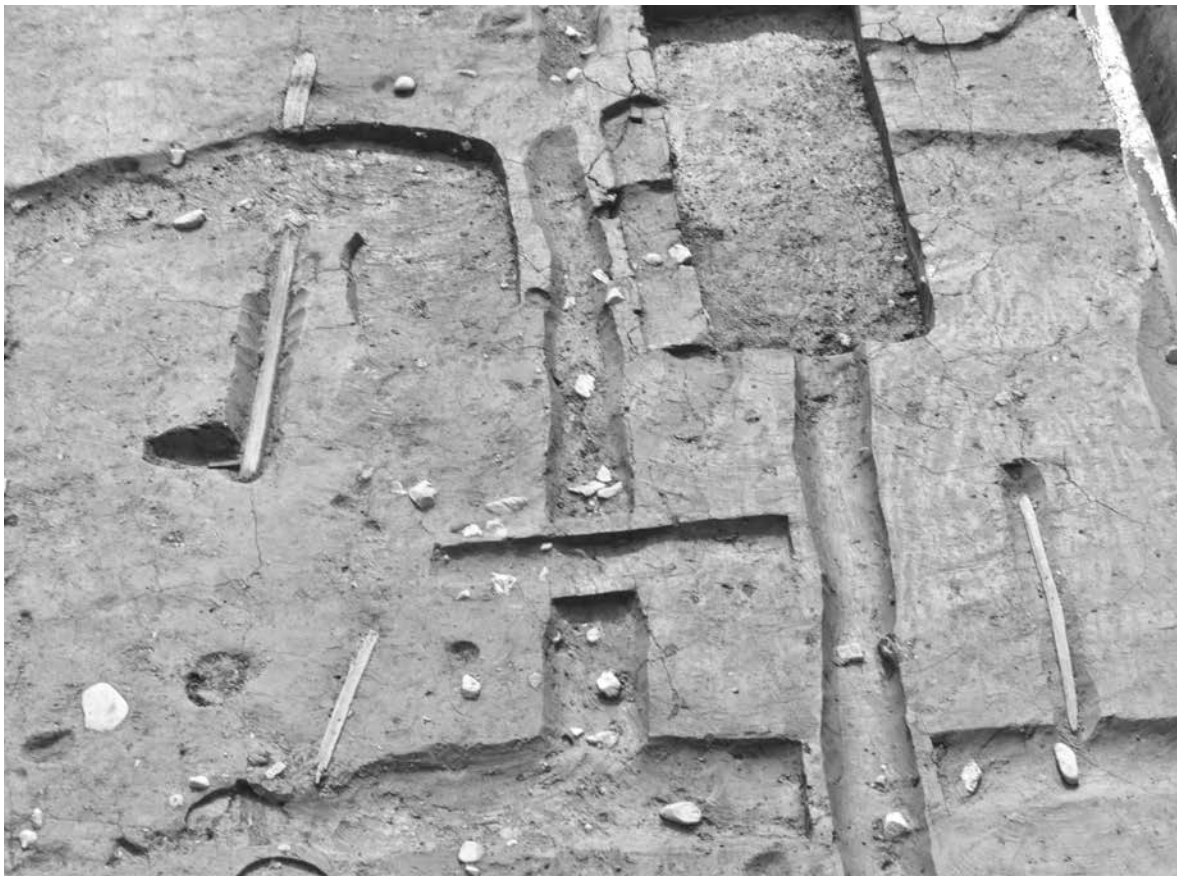
1　北区第1遺構面全景（北から）

2　北区第2遺構面全景（北から）

1　北区南半の溝 01（左）と溝 02（右）（東から）

2　北区北半第1遺構面湿地跡検出状況（南から）

1　北区北半第2遺構面湿地跡木製品出土状況１（南から）



2　北区北半第2遺構面湿地跡木製品出土状況２（北から）

1　井戸 01 検出状況1（東から）

2　井戸 01 検出状況2（北から）

1　井戸 01 完掘状況1（東から）

2　井戸 01 完掘状況2（北から）

1　井戸 01　土師器皿 AA 出土状況（東から）

2　土壙 01・02 完掘状況（南から）

1　土壙 01　土層断面（東から）

2　土壙 02　土層断面（東から）

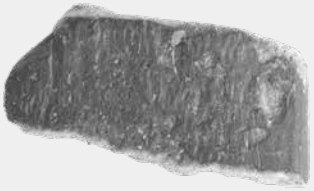
図版49　遺物1

1

2

3

4

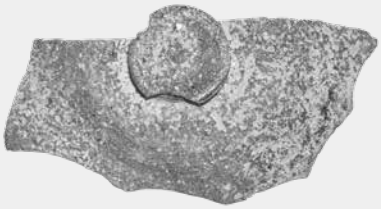


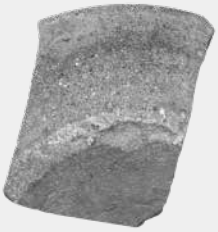
5

6

7

8


9


10

11

12

13

図版50　遺物2

14

15

16

17

18

—

19

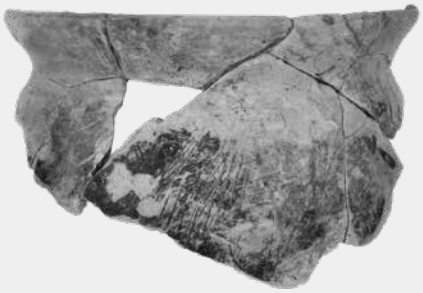
20

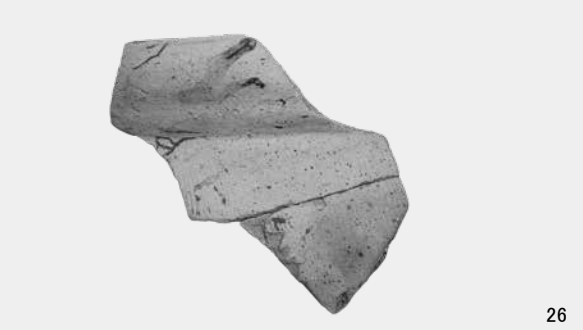
21

22

23

24


25


26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

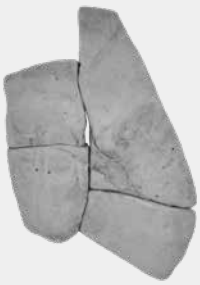
37

図版52　遺物4

38

39

40


41

42

43

44

45

46

47

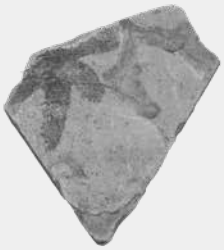
48

49

図版53　遺物5

50

51


52

53

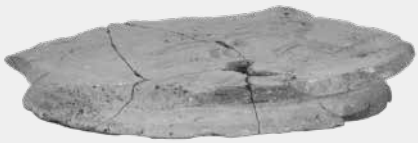
54

55

56

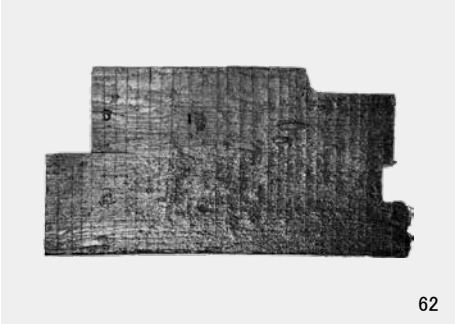
57

58

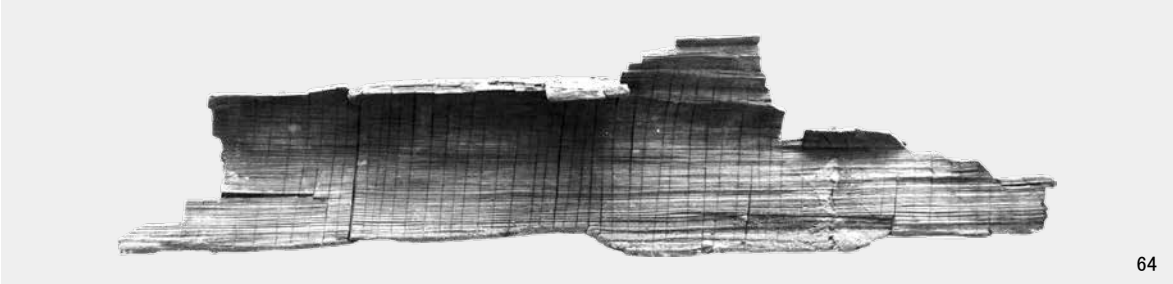

59

60

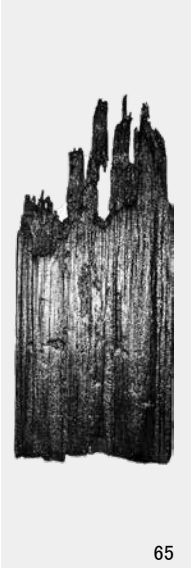
61


62

63

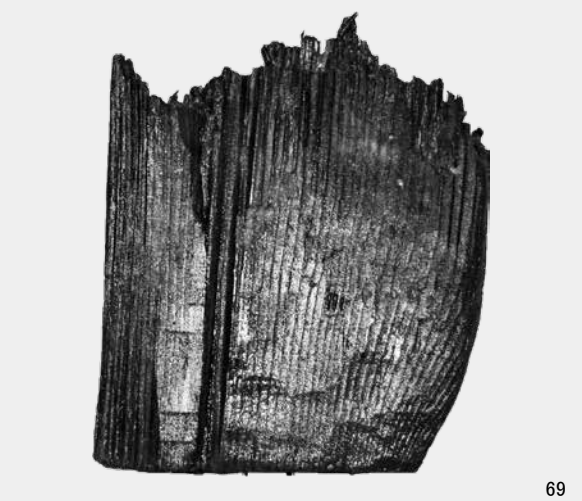

64

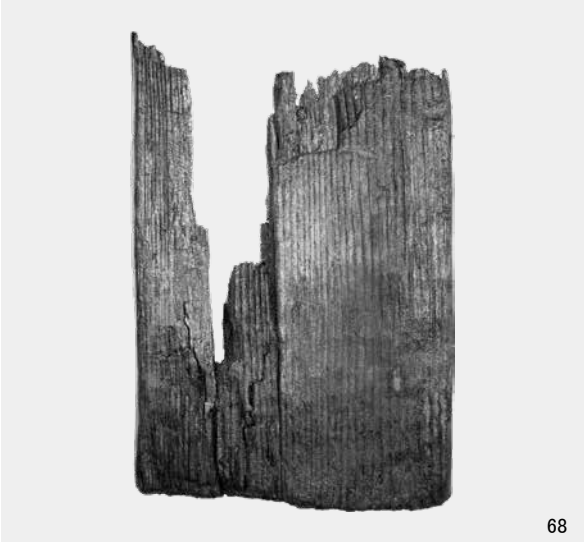
1 井戸 01 井戸枠


65

66

67


69

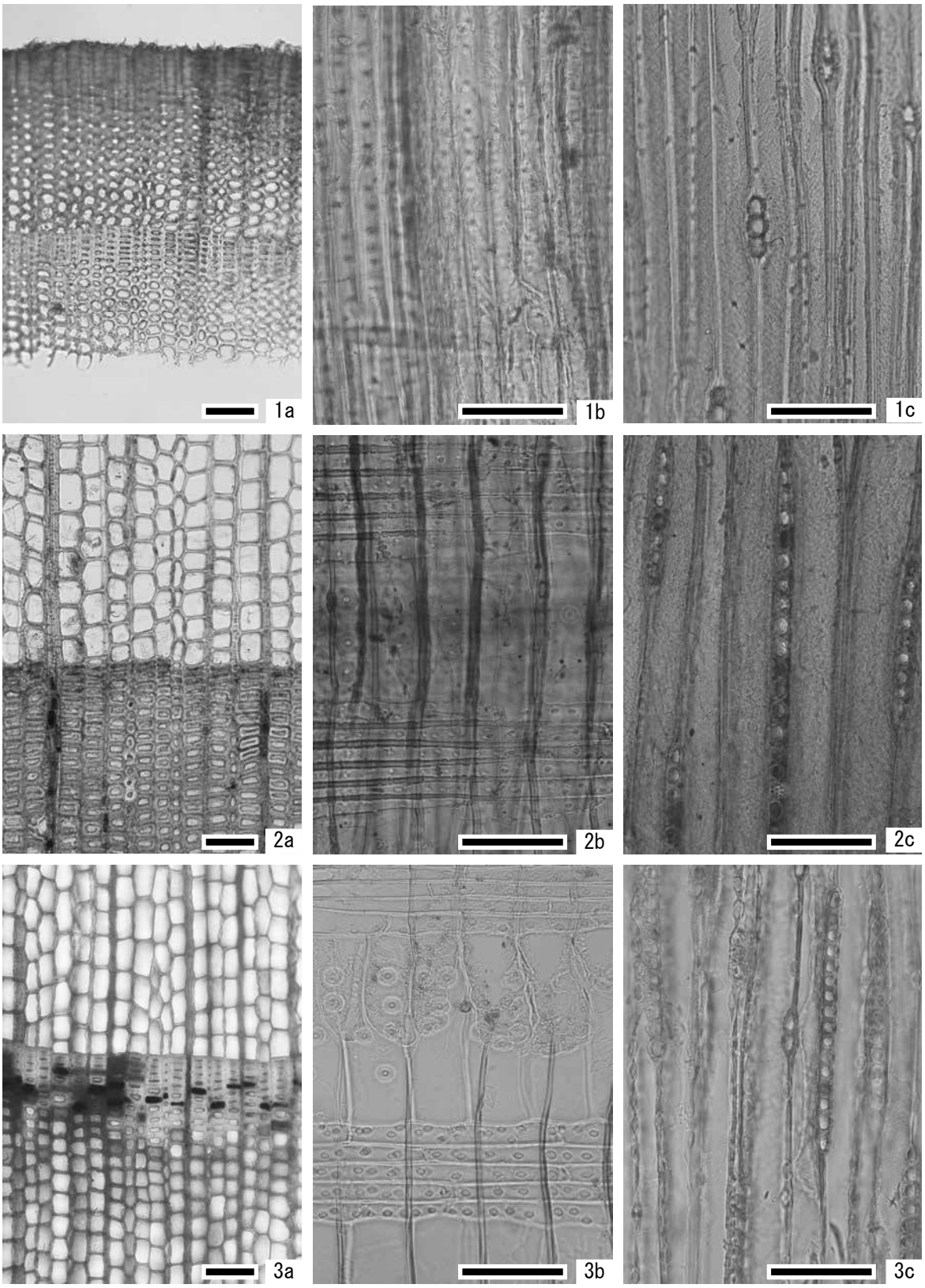

68

70

2 井戸 01 井戸枠外の縦板

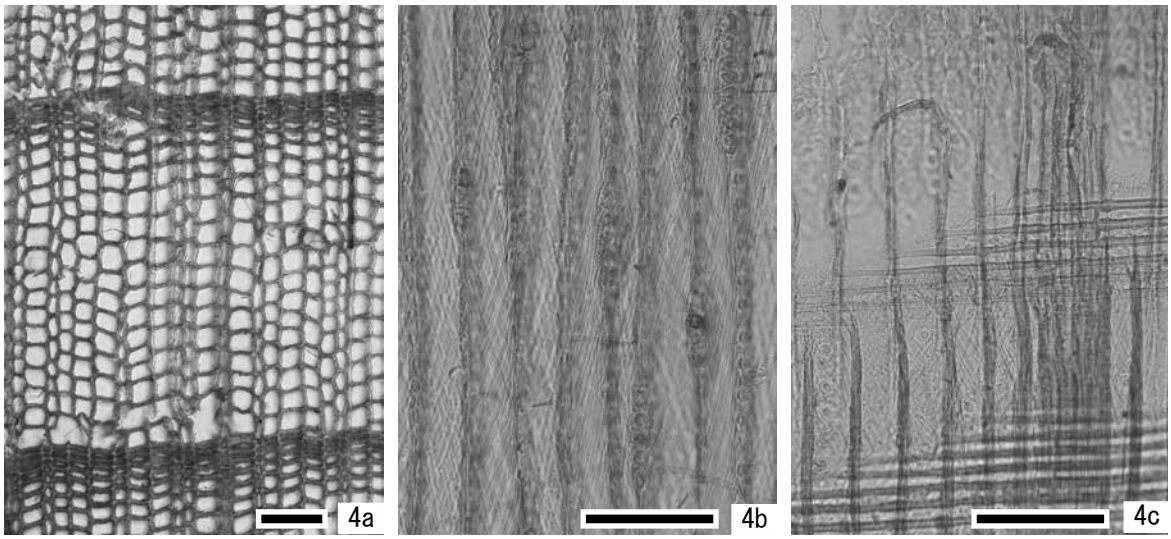
1　湿地跡出土の木製品

図版56　木製品組織1



1. カヤ（No.74）
2. モミ属（No.69）
3. スギ（No.65）

a：木口　b：柾目　c：板目
スケールは 100 ㎛



4　ネズコ？（No.79）

a：木口　b：柾目　c：板目

スケールは 100 ㎛

報　告　書　抄　録

ふ り が な	へいあんきょうくじょうにぼうはっちょうあとはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	平安京右京九条二坊八町跡発掘調査報告書
副　書　名	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	濱口　芳郎、新山王諒太、永井　信弘
編 集 機 関	安西工業株式会社
所　在　地	神戸市西区上新地3丁目3番1号
発　行　者	安西工業株式会社
所　在　地	神戸市西区上新地3丁目3番1号
発行年月日	西暦 2021 年6月 30 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京右京九条二坊八町跡（へいあんきょうう きょう くじょう に ぼうはっちょうあと）	京都市下京区梅小路高畑町（きょうと しし もぎょう く うめこうじ たかばたけちょう）1－2	26100	1	34 度 59 分 00 秒	135 度 44 分 01 秒	2019 年 12 月 9 日 ～ 2020 年2月 28 日	396 ㎡	マンション建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京右京九条二坊八町跡	都城跡	古墳時代後期～平安時代初頭 平安時代前期	針小路北側溝 針小路築地内溝 井戸、土壙 自然流路	土師器、須恵器、木製井戸枠、建築部材	

成果要約	平安京関連の遺構である針小路北側溝と築地内溝、そして平安時代初頭の井戸が確認できた。 右京八条二坊の東半域から九条二坊の東北地域の広範囲に確認されている湿地堆積層の南端を検出した。 また、地山の高低差が調査地内の南北で2m 程度であり、北が低いことがわかった。